
偽クノイチ異界譚

蒼枝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽クノイチ異界譚

【Nコード】

N7892Z

【作者名】

蒼枝

【あらすじ】

神楽紫乃（21）は忍者村の忍者ショーのアクターとして働き、余暇には戦国オンラインという戦国時代をモデルにしたネットゲームを楽しむ生粋の時代劇オタク。

そんな彼女が世界同士の接触事故に巻き込まれ、とばされたのは異世界「ファリアス」

どうやら二つの世界間でマナをやりとりするための安全弁、と言う役割を負わされてしまったらしい。

世界の管理者からおわびとして「戦国オンライン」の自キャラと

同等の能力をいただいた紫乃は特に魔王がうんちゃらということも無いのでまったり異世界ライフを満喫することに。

序章（前書き）

蒼枝と申します。

長編を書くのは初めてです。

つたない文ですが、観想いただければ幸いです。

かるい百合展開、暴力シーン、残虐な展開があるかもしれません。
苦手な方はご注意を。

序章

「…武藤陣内殿とお見受けする」

真っ昼間、町はずれの街道で典型的な忍者装束に身を包んだ細身の女が、浪人風で総髪（おんがみ）の男に問いかけた。

「忍びか…。さては越後屋に雇われたか。いかにも拙者が武藤陣内じゃ」

「潔いことだ。用件も分かっているようだな…その命、頂戴する」
女は身をすっと屈めると、逆手に短刀を構え浪人に向かって疾走した。

「簡単にくれてやる訳にはいかな！」
抜き打ちに放った浪人の刀が女の短刀を迎撃する。

鋼同士の激突に、街道に甲高い金属音が響くかと思われたが、

かしっ…

響いたのは何とも迫力のない軽い音だった…

『えー、これで午後の部の殺陣実演は終了となりま〜す』

忍者屋敷の中にある女性用控え室（スタッフルーム）で休憩していた私の耳に、そんな放送が流れてきた。

「これにて本日のお仕事終了、と」

終業時間を確認して、私は頭巾と鉢金を外してロッカーのフックに引っかけた。

現実的に考えれば、昼間っから真っ黒い忍者服を着るなどあり得ないし、武士相手に真っ正面から名乗りを上げて戦いを挑むなど忍びの風上にも置けない（？）所行である。

だがこれが観光地のイベントとなれば話は別だ。

新潟県の上越市と糸魚川市の間くらいにこの小さな村：というか観光地はあった。

過疎に過疎が進んだあげく廃村一步手前になったこの村は、若者と観光客を呼び込む手段として村を忍者村として再開発したのだ。

まあ、忍者を観光に、というのも由来が無いではない。

ここら辺はかの上杉謙信侯のお膝元。軒猿のきざるという謙信侯お抱えの諜報集団がいたと言われているあたりなのだ。

で、高校卒業後、新潟市で仕事を探していた私こと、神楽紫乃かぐらしの（21）は、2年前故郷が忍者村へと再開発されたとの知らせを受け、内定しかけていた仕事を蹴って故郷へと帰ってきたのだ。

まあ、うら若き乙女がなんで忍者村！？と思うかもしれないが、何の娯楽もなかったこの村では、じいちゃんと見た再放送の水戸黄門や必殺仕事人などの時代劇が唯一と言っていい私の娯楽だったのだ。

三つ子の魂百まで、の言葉通り、その後も順調に時代劇オタクへの道を進んだ私にとっては渡りに船な職場だったという訳。

「神楽さん、先上がるね」

「あ、お疲れ様」

先ほど私と殺陣を演じた甲斐さんというバイトの人がドア越しに声をかけて行く。

わざわざ女子が着替えている（かもしれない）ところまで来て声をかけていくとか、ちよつとどうかなと思うけど、まあ、この村は若い娘が極端に少ないからある程度仕方ない。

私程度の容姿でもけっこうもてるのだ：多少大目に見ている。

「それよりもっ：と」

私はロッカーの中からスマートフォンを取り出すとアプリを起動する。

『戦国の野望オンライン』

戦国時代をモデルにした架空の日本が舞台のネットゲームである。最近出たこのスマートフォン版は今まで私がプレイしていたパソコン版のアカウントとキャラクターを引き継いで使えるのです。私のレベルはかなり高い。

忍者LV85、陰陽師LV76、鍛冶師LV60、薬師LV77
1アカウントで作れるキャラクターは4体、そのすべてがマスターレベルといわれる50を過ぎている。

装備も自キャラに鍛冶師がいるので不自由はしてない。

たぶん一対一なら「信長」や「家康」クラスのボスとだって勝てるはず。

取り巻きがうっとうしいから現実には無理っぽいけど。

「さてと、今日はどの子にしようかな♪」

どのキャラを選んでもすべて名前は統一して神楽紫乃と本名を使っているのは、古風な名前なので、意外と世界観に合っているのではと思っているから。

「クノイチちゃん君に決めた！」

スマートフォン画面に映ったクノイチの姿をタッチしようとして…

そのまま私の指は画面に吸い込まれた。

森の中

「む…うん」

草いきれの臭いや土の感触に私は意識を取り戻した。

「…なに？」

視界一面に広がるのは木。そして草。広い空。

「え？」

いまいち状況が理解できない。

私はさっきまで忍者屋敷の中で戦国オンラインを：

なのになんで屋外に。しかも森の中に倒れているのだ？

場所自体は田舎だからちょっと山には入ればこんな所はいくらでもあるけど…

「忍者服のままで外出はしないわよね〜いくら私でも」

そう、服装はさっきの殺陣イベントの時のまま。鉢金と頭巾を外した忍者服のままだ。

「さらわれた、とか？でも拘束もしないで外に放り出すというのも変だよねえ…あ！スマートフォン！」

私は重大なことに気が付いた。さっきまで持っていたスマートフォンが、無い。

「うぎゃあ、個人情報のか塊だよ？しかも戦オンのアカウント盗られたら目も当てられない」

さっさと村に戻ってスマートフォンの停止手続きしないと…『ぴろりりん』

「え」

聞き覚えのある音。メールの着信音だ。

「え、だってスマホ自体が無いのに「メール」が何で」

と言いかけた時、私の目前に浮かんだのは…メール画面。

まごうこと無き私が持っているスマートフォンの半透明な「画面だけ」が空中に浮かんでいた。

「な…」

私が絶句しているとその画面の中の新着メールが勝手に開く。

『拝啓 神楽様。突然のことできぞ驚かれていますでしょうが、こはあなたのいた地球、日本ではありません。フリーアスと呼ばれる、あなたから見れば「異界」です。』

「メールが透明で勝手に！しかも何その中2設定！」

『そんなこと言われても現実なので中2設定とか言っても仕方ないのです』

「メールがリアルタイムで返信！？むしろチャット！？」

私もいろいろ混乱しているんです。

『まずはフリーアス世界の管理者たるわたくしからお詫びを。』

今回の事故は全くの偶然なのですが遠因はこちらの世界にあるので…』

「…続けて？」

とりあえずこの空中ウィンドウみたいな技術はこんな森の中でできるコトじゃないはずだ。何か異常な事態であるということは分かる。であれば、まずは情報を得なければ。

『私たちの世界フリーアスは元々あなた方の世界とごく近い位相に存在していたのですが、あなた方が科学技術を発展させたように、私たちの世界では魔導技術が発展したのです。』

「ふんふん」

『…ですが人間達や魔物が使う「魔法」や「魔導」が少しずつ世界の「マナ」を消費して…崩壊の危機に陥っていたのです』

「マナ？」

『魔力や魔法の元となる、世界にあまねく存在するエネルギーです。世界が世界として現実に存在する為の力、といっても良いかもしれせん』

「それが無くなるってコトはどうなるの？」

『存在が無くなります。フリーアスという世界は「元々無かった」ことになるのです』

「…まさか、それをなんとかしてくれってこと？ テンプレ召還め…」

『いえ、それはすでに解決しました』

「はん!？」

解決したんなら帰して下さい。てか、今までの説明は何？

『正確に言えば神楽さんがこちらの世界にすることで絶賛解決中です』

なおさら訳分からん。

『ごく近い位相に二つの世界はあると言いましたが、あまりに近すぎて…こちらのファリアス世界は磁石に吸い寄せられるようにマナが溢れるそちらの地球に引き寄せられていったのです』

「マナなんてファントジーな力、ウチの地球にはなかったと思うけど」

『そちらは世界構造自体が魔法が発現しない作りになっていますから、マナがあっても使い道が無く、時間とともにどんどん増えていったのです。こちらの世界とは別の意味で世界に悪影響を与えかねないほどに』

「それで足りないそちらと、ただ余りの地球と…世界同士をくっつけてマナをどうにかしようって？」

『世界同士の引力にまかせて、ただ接触するのを放っておいたら救世どころか世界崩壊です…なので私とそちらの世界の管理者はなんとかお互いの世界のごく一部が接触した時点で固定し、少しずつマナがこちらに流れるようにしたのです、が』

「が？」

いやな予感しかしない。

『…その接触地点にピンポイントに神楽さんがいて…神楽さんは地球からファリアスへのマナの通り道としてこちらの世界に固定されてしまったのです』

「なんじゃそりゃああああああああ!!」

『す、すみませんすみません…』

「こ、固定されたって…帰れないの？」

『現時点ではマナの流れ込んでくる勢いが強すぎて…1000年ほどたてばなんとかお帰しできるとは思います』

「塵も残ってないよっ！1000年！？」

『あ、流れ込んでくるマナの影響でほぼ不老なので、1000年どころか10000年でも問題ないです』

「……」

『あつ、それにほら、接触した時使っていたデータデバイス…「すまふお」の「戦オン」のデータもなるべく反映しておきましたから！こちらの世界でも生活するに困らないと思うんです！』

「はい？戦オンを反映？」

『うん、名前も一緒だし容姿も近かったし、本人との関連づけが楽だったからサービスしました』

「いや、しときましたって…まあ、生活に困らないなら良いか…それこそなんて中2設定」

『ずいぶんあっさり納得されますね』

「うーん、向こうにはもう家族もないしね。帰れないなら帰れないで前向きにこれからのことを」「きゃああああああっ！！」
説明の途中で突如森に響き渡る女性の悲鳴。

うん、中2設定の上にテンプレですね…

「これ、助けに行った方が良いよね…？」

『私はあくまで管理者ですので、どうこうしろとは言えません。が、能力的には楽勝レベルかと』

「うう…わかったわよ、行きますよ。寝覚め悪い思いするのもやだし…」

『ちなみに「技能」もそのまま使えますから…がんばって下さいね…私はこれ以上干渉できないのでこれからはあまりご連絡できなくなると思いますが』

「えっ！？ちょ…」

それを最後にプツン…とメール画面は閉じてしまった。無責任な

やつだ。

「もう…技能スキルが使えるって行ってたな…「技能変更」とでも言え
ば…おっと」

目の前にスマフォの画面が再び現れる。ただし今度は「戦オン」
の技能編集画面だ。

「とりあえず雑魚狩りセットかな…」

私が事前に設定しておいた技能セットから「雑魚狩りセット」を
タッチ。すると…

「おお、体が軽い。移動補助「疾風」の効果かな」

疾風、健脚、回避術極意、会心の一撃、三連撃、不意打ち、火遁
の術、反撃術極意、隠れ身、二刀流

がセットされた事が頭の中に情報として入ってくる。

さて、とりあえずいろいろ悩むのは後にしてイベントクリアと行
きますか。

初戦闘

「何、何なのアレは」

「こんな街に近い森の中で：ただの蛇ならともかくスケイルヴァイパーってCランク魔獣じゃないのっ！」

「お、お前ら助けるよ！高い金払ってんだから！」

「やれるだけはやってみますがね：最悪荷を捨てて逃げる準備を
して下さいよ？」

「ぼっ、馬鹿を言うな、七色朝顔40株だぞ！？いくらすると：」
私が悲鳴の聞こえたあたりに着いた頃は：修羅場も佳境だった。

二頭立ての馬車の陰に隠れているのは小太りの男：その彼を守る
ように三人の男女が武器を構えて立っている。

それと対峙するのは二メートル以上はありそうな蛇？まるで鎧を
つけたような外殻を持つ蛇が5〜6匹。

「あの〜：お手伝いしましょうか？」

「うお！？あんたどこから：ま、まあいい、報酬は出すから奴ら
を追い払ってくれ！」

私がとりあえず一番近い所にいた小太りの男に声をかけると男は
一も二もなくうなずいた。

ふむ、報酬ね。覚えておきましょう。

とりあえず『隠れ身』をまとって大蛇の後ろに移動してから『不
意打ち』を発動。

あ、武器装備してなかった。まあいいか。こいつら弱そうだし。

大蛇の一匹に私の手刀がたたき込まれると同時にその首は「すぱ
ーんっ」と小気味よい音を発して胴体から転げ落ちた。

不意打ちだけじゃなく『会心の一撃』も発動したらしい。

「なっ：」

「どこから？てゆうか誰！？」

「素手でって：なに？スケイルヴァイパーの首って素手で刈れる

もんなの!？」

隠れ身はすでに攻撃開始と同時に解除されている。でもたぶんこの程度の敵なら問題ないみたい。

さっきから残りの四匹（一体は男の人がその巨体で押しとどめている）が私を敵と認識したのか一斉に攻撃を仕掛けているんだけど掠^{かす}りもしないのだ。『回避術極意』の成果だろう。

「あ、こっちは私がお相手しますので、そっちのおっきい男の人を手伝ってあげて下さい」

「無茶よ! 一人で四匹って…全然余裕そうね…わかったわ、誰だか知らないけどありがとう! キュアリー、ゴージャックの旦那を援護するよ! 回復魔法の準備をして!」

「わ、わかったクイン!」

ふーん、ゴージャックにクインにキュアリーね。大剣を持った筋肉の塊みたいな大男の戦士がゴージャック、体にびったりの革鎧にショートソードっぽいのを持った銀髪のグラマラスお姉様がクイン、若草色のマントに身を包んだ栗色の髪の少女がキュアリー…かな。

などとつらつら考えながらも私の体は大蛇の攻撃を自動で回避し『反撃術極意』によって無意識にカウンターを叩き込みクリティカルヒットを量産していく。

「うりゃあ!!! 止めだ! 『岩斬剣』!!!!」

「『ゲイルスラッシュ』!!!」

「かの者達に祝福を! 『キュアライトウーンズ』!」

私が最後の一匹の首をはねたのと同じくらいに向こうの三人も大蛇を始末したようだった。

「ぜー、ぜー、ざ、ざまあみやがれ」

「はっ、はっ…Cクラスの中でもっ…こいつらは「堅い」「避ける」「麻痺毒付き」の三拍子そろった厄介なやつだからね」

「おう、お前らの援護があって助かったぜ…って、そっちの敵はどうしたんだ? まさか…」

「うん、さっき助けに来てくれた彼女が四匹とも一人であっさり

…」

「うわー、凄いね、ほとんど一撃だよ」

「信じらんねえ凄腕だな…すまねえ、姐さん、助かったよ」

彼らの心からの賞賛と感謝がくすぐったくも居心地悪い…私の力は偶然手に入れたチート能力のおかげなのであって、彼らみたいに命をかけて磨いた物ではないのだ。

「おお、貴様ら良くやったぞ！さあ、護衛ども、ぐずぐずしないで街へ向かうぞ。今日中に納品しなければならん」

どうやら小太りの男は商人で、戦っていた三人は雇われた護衛、ということなのかな。

「ああ、ちいと待って下さいよ…こいつらの額の熱感知宝珠は討伐証明部位だ。これだけでも持って行かないとな…キュアリー、その間に御者の嬢ちゃんの傷を見てやれ」

「うん」

ん？彼らの他にも同行者がいたのか、とキュアリーについて行ってみると…馬車の反対側に小柄な少女が倒れていた。

おお、ネコミミ尻尾付きだ。凶悪に可愛い…が、右腕がほとんど付け根から取れかけている。痛そう。

「ふん、放っておけ！片腕をちぎられたんだ、傷を癒しても片腕じゃ御者はできん」

「…あんたの所有奴隷だろ」

「だからだ！あんな獣人の小娘、夜伽にも使えなければ娼館に売り払うこともできん…格安だからと護衛兼雑用に買い取ってみればあつという間に隻腕だ。大損だわ！」

「…この…」

「ゴーバック、やめときな…コスイネンの旦那、せめて街までは連れてって良いかい？こんな所に置き去りにしちゃあ、いくらなんでも悪評が立つよ」

「む…仕方ないな」

クインが商人…コスイネン（笑）の利を諭して説得する。ぐっじ

よぶだ！

でも、なんとかできないかな：街についてもそのまま放置じゃ結局のたれ死にしよう。

奴隷の中でも彼女はかなり値が安いらしいし、片腕ではできる仕事も多くは無からう。

んーもしかして、なんとかできるか？

私は『戦オン』所持品欄を呼び出し、所持品を確認する。これらを実際に使えるのであれば：私は意を決してコスイネン（笑）に声をかけた。

「あの」

「ん、おお！先ほどの！見ておりましたぞ！いやあ、お強い！助かりました：どうです、あの役立たず共のかわりに私の商会の専属護衛として雇われませんか？」

「あはは、ごめんなさい、ちょっとやることがあるので：それよりも」

「うん？なんじゃ？」

「報酬を下さると、先ほどおっしゃいましたね？」

「うん？うーん、言った、かな？」

とたんに苦々しげな顔になるコスイネン。

「言・い・ま・し・た・よ・ね？」

「あー、言った！言ったが今は荷を売りに行く最中で余計な金はないぞ！」

往生際が悪いこのデブ。

「ご安心を。お金ではなく、彼女、譲っていただけませんか？」

「彼女：て、あの獣人女か？そんなので良いのか」

「ええ、ただ今後の所有権のことで揉めたくはありませんので、きつちりと正式な手続きによる譲渡をお願いしたいのですが。良いですか？」

「あ：ああ、そんな事ならお安いことじゃが：ネイル！こっちは来い！」

キュアリーさんに治療して貰ってすでに出血は止まっているネコミミ少女、ネイルちゃん。

その真っ白な肩までの髪が血に染まっている。見ていて痛々しい。「いいか、お前のような役立たずをこちらの方が貰って下さるそうだ。誠心誠意尽くすがいい」

こくり、と頷くネイルちゃん。

「では譲渡契約を：その獣人の首輪に触って下され」

「? とう?」

「結構。おお、そういえばあなた様のお名前をお聞きしていませんでしたな」

「シノ・カグラよ」

一瞬偽名を使おうとも思ったが、正式に手続きを踏んで貰い受けるのであれば偽名はまずいと思い直し本名を名乗る。

「うむ、それでは譲渡手続きを始める」

コスイネンもネイルちゃんの首輪に手を触れる。

「契約神プロミスに申し上げます。セコビツチ商会コスイネン所有の奴隷ネイルをシノ・カグラ殿に無償にて譲渡する。シノ・カグラ殿及び奴隷ネイルはこれを了承するか?」

その言葉と同時にネイルちゃんの首輪を中心にうつすらと光が広がる。何これ。

「了承します」

私とその光にぼけっとしているとネイルちゃんの声が聞こえた。なるほど、これが「正式な譲渡」なのね。

と言うことは、私も答えなきゃいけないのだろう。二人に対して問いかけてたし。

「りよ、了承するわ」

「よろしい、これで譲渡手続きは完了した。ネイルは煮るなり焼くなり好きにしていいますぞ」

「そんなんしないわよ。愛でるに決まっているじゃない」
静かに収まっていく光を見ながら私はきっぱりと答える。

「こんなっ：ふわっふわな尻尾なのよ！？耳なんかもふもふよ！
？これを愛でないでどうするの！？」

「いや：まあ、人それぞれですからな…」

隻腕の獣人少女を愛でると言いきる私に引き気味のコスイネン。

「シノ殿っていうのか：ありがたいな。その、いろいろと。俺は
ゴージャック。18レベルの『戦士』だ」

くすんだ短めの金髪、大剣を背負った大男の戦士：ゴージャックが
手を差し出し握手を求めながら自己紹介をする。

いろいろ、には私がネイルを引き取ったことも入っているんだろ
う。厳つい顔に似合わない人だ。

ん？18レベルって言ったな。この世界ってレベル制なの？魔法
といいレベルといい、そのまんまRPGの世界だな。

「わたしはクイン。『レンジャー』でレベルは15。感謝するわ
シノさん」

体にぴったりの革鎧に銀髪のグラマラスお姉様クインもショート
ソードを納めてあいさつ。

あーよく見ると凄い美人さんだ。この人。女の私でもお色気でく
らくらくる。

「お金はないけど、とりあえずこれは感謝の証し：ね？ちゅっ」

クインさんは私を両腕の中に納めてハグすると、私の耳に軽くキ
スをした。

うぎゃああああ！田舎モンの私には刺激が強すぎるですよ！百合
百合な道に走ったらどうしてくれますか！

「うふふ。照れちゃってかーわいい」

「あ、あの、ありがとうございます。私はキュアリー。レベル
13の『治療術師』です」

若草色のマントに身を包んだ栗色の髪の少女、キュアリーが私の
そばに駆け寄ってきて上目遣いで尊敬のまなざしを向けてくる。

クインさんが大輪の赤い薔薇ならキュアリーは清楚な白菊。方向
性は違うけどめっちゃ可愛い。

ネイルも耳さえ無ければ人間の美少女と言っていい容姿だし、この世界のおなごは美形がデフォルトなのか？

すると私の容姿は、この世界ではそこの雑草レベルか？ちょっと落ち込む。

「あ：ネイルです。『雑益奴隷』レベル1です。どうかよろしくお願いします：ご主人様」

片腕を亡くしたのがショックなのか、感情のこもらない声で挨拶するネイル。

ごめんね、もう少しまってね。

「神楽紫乃：こちらの読み方だとシノ・カグラかな。『クノイチ』よ。レベルは内緒」

戦オンのレベルとこちらの世界のレベル制とが対応しているか解らないのでぼかして挨拶に答える。

「うんうん、あんまり高レベルだと知られると依頼が殺到したり、いろいろ面倒なことも多いからな。そこら辺は気にしないさー。しかし、クノイチ：ね。聞いたことのないクラスだなあ。クイン、解るか？」

「んー、私も初めて聞いた。だが戦闘の様子からして、スピードと技量に重きを置いた『軽戦士』のさらに上位クラス：もしかしたら隠しクラスかもね」

：なんかまた解らない言葉が出てきたな。クラスに上位クラス？職業って事？RPGの転職システムみたいなものかしらん。

「う、うんそんな感じかな」

適当に話を合わせておく：後でネイルにいろいろ聞こう。

「ま、まあそれより：ネイルの治療をしちゃいましょうか」
ちよつと強引だけど話をずらそう。

「：ごめんなさい、私の技量ではこれ以上の治療は：」
泣きそうになっているキュアリー。

「あ、ちがうのっ！私、たまたま良い薬を持っていてね、効くかどうかは解らないけど試すだけ試してみようかなーって：」

何で皆さんそんな驚いた顔をしてらっしゃいますか。特にコスィネン。

「ど、奴隷にそんな高価な…部位欠損を直せるような魔法薬を使うと!?!」

「いや、まあ…効くかどうかは解りませんって。試しにですよ」
「いかな、奴隷に薬って普通は使わないのか？」

私は所持品一覧から薬師のキャラで作ってストックしてあった丸薬をいくつか取り出す。

清涼丹…各種状態異常の完全解除。

万金丹…体力の完全回復。

再生丹…部位欠損（一カ所）の回復。

どれもお店で買うとかなり高価だが、クノイチの採集技能で材料を集め、薬師が生成…と手間以外元手はかかってない。

あの自称世界の管理者は戦オンのデータをなるべく反映したと言っていた。なら、たぶん…

「はい、これ飲んで」

懐から出したふりをしてそれぞれ一錠ずつネイルの左手に受け取らせる。

「あ、あのっ! こんな高そうなお薬っ! いただけません!」

「…ネイルは私の奴隷でしょ?」

「は、はい」

「なら黙って飲む。私は自分の物には手入りを欠かさないタチなの」

「は…はい」

覚悟を決めたのかやっとネイルは三つの薬を飲み込んでくれた。するとみるみる劇的に効果が現れた。

「あ、あ、あ、あ、あああああああっ!」

ネイルの全身が光り輝き、体全体に散っていた青あざがまず消えていく。

「あ、熱いですっ! ご主人様あああああっ!」

だ、大丈夫かな。過剰反応過ぎるような気もする。抱きしめてあげれば少しは安心するかな。

「大丈夫、ネイル、落ち着いて」

両手の中に抱きしめて背中をぽんぽんと軽く叩いてやる。

「あっああ…」

光が収まりネイルも落ち着いた所で確認すると…

ネイルの右腕はつるつるの綺麗なお肌で再生していた。

「…おいおい、すげえな…！こんな劇的な効果を持つ薬なんて、それこそエリクスーレベルじゃねえか」

「…そうね、売れば一財産よ。それこそ雑益奴隷どころか一流の性奴隷だって買えるくらいだね」

「うう、自信なくします…」

護衛三人組の言葉にびっくり。こっちの世界ではそんな高価なのか。いよいよとなったら売りさばけば金銭面では何とかなりそうだけれど…あんまり目立ちたくないし最後の手段にしよう。

「ネイル、大丈夫？どこかおかしい所はない？」

「は、い、ご主人様…どこも…」

呆然と自分の新しい腕を見つめるネイル。

「ご主人様…変です。マナの動きが以前よりはつきり解ります…それに…私、魔力なんてほとんど無かったはずなのに、今は溢れるくらい感じるんです！」

「ありゃ、薬の副作用？と思ったその時…『ぴろりろりん』とメールの着信音。」

『あなたは世界のマナの出口なんだから、うかつに「好意を持つて」ハグしちゃったりすると相手にマナ…魔力を分け与えちゃうわよ。気をつけてね』

もう連絡しないって言ってたくせに…って、ネイルの異常は薬じゃなくて私のせいだった！

「ご主人様…」

目が潤んで色っぽいですけど。ネイルさん。

「わたし、一生ご主人様に尽くします！たとえば奴隷契約が切れても、生涯この身はご主人様の物です…」

そういうとネイルは私の足下にひざまづ跪き、私の足の甲に口付けた。

「そ、そんなことしないでいいの…でも、そうね、私はこの大陸には不案内だから、いろいろな力になってくれると嬉しいわ」

そっとネイルの手を取って立たせてやる。

「はいっ！ご主人様、私にできることなら何なりと！」

正直ネイルの宣誓にちょっと萌えたのは秘密だ。

港町サザンとギルド（前書き）

説明多め。

港町サザンとギルド

森から南下して約1時間、ようやく街…港町サザンが見えてきた。

道中、コスイネンがやたらしつこく私の薬について探ってきたが、「以前貴族の命を救ったことがあってそのお礼に譲り受けた。今のが最後までもう持っていない」という設定でとぼけ倒した。

護衛三人組やネイルともいろいろ話をしたが、ぼろを出さずに情報だけ聞き出すのは難しく…途中『話術・上級』『色仕掛け・上級』という技能があったのを思い出しセットしてみると、今までの苦労は何だったのかと思うくらい情報を引き出すことができた。本来はゲーム中で敵国のNPCをごまかす技能なんだけどね。

それによるとゴージャック達、護衛三人組は『冒険者ギルド』と呼ばれる組織に属しているようだ。

魔物退治や護衛、探索etcを主に請け負う一種の派遣業者みたいな所らしい。今回はコスイネンからの依頼で護衛に付いていたという訳だ。

あと、ギルドでは条件を満たした者達に職業の基礎知識や技能を魔法で焼き付けることもしておりそれを『クラス』というらしい。

『クノイチ』はレアな隠しクラス…と思われるていた訳だ。

ちなみにネイルの『雑益奴隷』というクラスも存在する。金で買った奴隷を自分の盾としてギルドの仕事に使う者達もいるためだ。

「そっすか、じゃあシノ殿は他の大陸からいらしたんですか」

「ええ、向こうの魔法研究機関の転送魔法の実験が暴発したらしくてね。たまたまお偉いさんの護衛で現場に居合わせたのが不幸だったわ…事故に巻き込まれて気が付いたらさっきの森の中よ」

「それは…大変でしたね」

沈痛な表情で同情してくれるクインさん。

「シノさんの薬も格好も見慣れない物だと思ったら他の大陸からだったなんて…びっくりです」

うん、自分で言ってる苦しい言い訳だと思うが、幸い技能のおかげで不審には思われていないようだ…まあ、異世界人だなんて本当のこと言っても、なおのこと信じてくれないだろうし。

「じゃあ、シノ殿もこの街でギルドに登録すればいいですよ！旅をするなら身分証代わりになるし、シノ殿ほどの腕があればAクラス入りだって夢じゃねえ」

「うーん、そうしよかな？とりあえず先立つものが欲しいしねえ」

そう、よく考えたら私はこの世界で使えるお金を持っていないのだ。戦オンの通貨は『貫』だし。

そうこう話しているうちに私たちはコスイネンの目的地、港町サザンへとたどり着いた。

「よーし、ご苦労だったなお前達。依頼完遂証明にサインしてやるから出せ」

「おお、これだ」

「よしよし…うむ、これで良いだろう…ほれ」

ゴーバックが差し出した書類にコスイネンがなにやら書き付けると再びゴーバックに渡す。

その書類を確認したゴーバックの表情がゆがむ。

「コスイネンの旦那、達成評価がCってのはどうゆうこった？荷は無事だったろう」

「ふん、イレギュラーな魔物が出たとはいえ獣人女の片腕を持って行かれたろうが：あの時点ではまだわしの所有奴隷だったからな、評価にマイナスが付くのは当然だ」

「：ち、しかたねえ」

「まあ、依頼未達成と評価されなかっただけありがたく思え、ということだ。はははは」

コスイネンはそのまま邪悪（主観）な笑みを浮かべつつ、商店街の方へ去っていった。そのまま納品に行くのだろう。

「いちいちむかつくやつね：ネイルちゃんがあんなやつを持ち物だったなんて、考えるだけで腹が立つわ」

私がコスイネンの去った方向を睨みつけながらそう吐き捨てる私の上着の裾をネイルがつんつんと引っ張ってきた。

「ご主人様：でも今はご主人様の物です」

そう言うネイルは本当の猫のようにスリスリと自分の首筋を私の背中にすりつける。

「ああっ！もうっ！可愛すぎるわネイルっ！」

私はネイルに振り返ると、がばっと両手で抱きしめた。

「でもね、ネイル、できればご主人様でなくて名前で呼んでくれる？」

「え…つと…シノ、様？」

「そう、そう、もう一回」

「シノ様…」

「うん、可愛い可愛い」

「あーつと…シノ殿？」

危うくネイルとの二人の世界に没入しかけていた私はゴーバックの声で我に返った。

「しっ、失礼…つい」

「どうします？とりあえずギルドに登録しに行くなら、ついでな
んで案内しますぜ？」

「あ、うん、お願いできるかな」

ネイルの柔らかな肢体から自分を引きはがすのには多大な精神力を要したが、表面上は何ともない振りをしてゴーバック達の後について行くことにした。

「おお、結構ちゃんとした所なのね…役場みたい」

「まあ、この辺は王都に次いで大きな街だからな…ヤクバってのがなんなのかはしらねえが」

私の独り言に律儀に答えるゴーバック。

「まあ、とりあえず入ろうぜ」

ゴーバック達に続いてネイルと一緒にギルドに入ると、中は役所のような窓口がいくつもあるスペースと、食堂が併設されたような作りになっていた。

「新規登録するならこっちの窓口だな。たしか…」

「はい、ここで結構ですよ」

受付のお姉さんがゴーバックの言葉を聞いていたのか答えてくれる。

「ああ、俺じゃねえんだ。こっちの姐さんの登録を頼む」

「はい、それではこの用紙に名前とお年、性別、希望クラスを書いて下さい：出身地欄は任意です」

「分かりました」

受け取った記入用紙に書き込んでいく。文字は日本と一緒になのね。…そう言えば言葉も普通に通じていたし、さすが一番近い異世界というべきか。

「それでな、こっちの姐さんは別の大陸からのお客でな。クノイチってクラスらしいんだが…大丈夫かい？」

「クノイチ、ですか。ちょっとお待ち下さい……………」
……………こちらにクノイチというクラスは無いので全くの新規クラスになります。魔法によるスキル焼き付けが出来ませんが、それでよろしければ新規クラスとして登録できますよ」

「ん、それでかまわない」

スキル
技能なんて腐るほどあるしなあ。

「ありがとうございます。新規クラスのスキル情報をご提供いただける場合は登録料が無料になりますけどどうしますか？」

「んー、それって所持スキル全部さらすって事？」

「いえいえ、クラスに独自のスキルなら一つで結構ですよ。汎用

スキルなら5つ位お願いします」

「ならいいか：スキル情報提供します」

「ありがとうございます。こちらの感応石に手を置いていただいで提供いただけるスキルを思い浮かべて下さい」

と、差し出されたのはマウスパッドみたいな真っ白な石。
それに右手を載せクノイチ特有の技能を思い浮かべる。

「はい、読み取り終了です。ご提供いただいたスキルは

『影縛り』消費魔力0

相手の影に手裏剣などを打ち込むことによって
暗示をかけ、動きを封じる効果がある。

関連能力値 M I D、D E X

抵抗能力値 M I D

基本成功率80%

で間違いないでしょう：か：って：ええええええ！？消費魔力0
で麻痺効果、成功率80%お！？いいいいい、良いんですか！？こ
んな奥義クラスのスキル登録しちゃって！？」

「かまいませんよ」

「すげえな、なんだその鬼スキル」

ゴージャックもしきりに感心しているが、そもそも、こっちで忍者
になれる人っていないだろうし、私自身は影縛りに対する耐性があ
るし、影縛りの上位スキルも持っているし。

元になった戦オンでは死にスキルだったんだよね。

「あ、ありがとうございます。それでは後は書いていただいた書
類の内容をギルドカードに転写して……はい、これに先ほどのよう

に手を置いて下さい」

渡された先ほどのよりも小振りな…言ってみればスマートフォンサイズの板に手を置く。

「ちょっと一分ほどお時間かかります……………はい、終了です」

一分間の内にスマホオサイズの板は漆黒に変わっていた。

「クラスによってカードの色は変化します…が、ここまで真っ黒というのも珍しいですね…カードを持ってみて『ステータス表示』と念じてみて下さい」

「はい」

ステータス表示…むん。

氏名シノ・カグラ 性別女 年齢21歳

総合レベル85 ギルドランクF

クラスレベル『クノイチ』85

ステータス

HP 2500

MP 測定不能

STR 17

VIT 15

DEX 18

S	P	D
1	8	
I	N	T
1	3	
M	I	D
1	8	

称号

世界の天秤
クノイチマスター

固有スキル

キャラクターチェンジ
マナ解放
マナ譲渡

属性補正

闇＋50％
炎＋20％
光－10％

祝福

名も無き世界の管理者

：なんか、うかつに人に見せられない内容ばかりな気が。
MP測定不能って！？称号世界の天秤ってなに！？キャラクター
チェンジするのは、たぶん別キャラ使うための能力だと思うけど…。

「あ、あの」

「はい？」

「これ、証明書代わりに使いたい時って、全部見せなくちゃダメ
なんですか？」

「ああ、いえ、名前、レベル、クラス、ギルドランク、性別、年齢以外は消すことが出来ます。消したままでも証明書としての効力がありますよ。それに…ギルド職員でもそれ以外のステータス部分は余程のことがない限り見る事が出来ないので、プライバシー面も守られます」

うん、それなら何とかなるかな。

「異常なく表示できたなら各項目の説明をしたいと思いますが」
「あ、お願いします」

「こほん、それでは…」

氏名、性別、クラスレベル、年齢、はそのままの意味です。

総合レベルは各クラスで得た経験値をすべて合算されたものから算出されます。

ギルドランクはギルド内でのシノ様の評価です。

ギルドランクは上から順にEX、S、A、B、C、D、E、Fとあります。

登録したばかりのシノ様はFとなりますね。

ちなみにCでベテラン、Bで一流、Aで超一流、Sは英雄クラス、EXは伝説クラスと言われています。

HPは生命力

MPは魔力

STRは腕力

VITは体力、頑健さ

DEXは器用さ

SPDはスピード

INTは知力

MIDは精神力

をそれぞれ表します。

HPMP以外のステータスは成人で平均8〜12で、人間だと最高値は各18です。

しかし、レベルが高いほど実際の効果は補正がかかります。称号は神々が認めた二つ名のようなものです。

固有スキルはクラスに左右されないその人だけのスキルです。属性補正は属性を持つ攻撃の威力や受けるダメージに関係します。

もちろん十の方が良いですが+20以上を持つ方は滅多にいません。

祝福は加護を受けている神やそれに準ずる存在のことです。と大まかに言ってこんな所です」

「お、お疲れ様…」

凄い、一気に息継ぎ無しで言い切ったよ。

「依頼の受け方などは隣の窓口でご用命下さい」

「うん、ありがとう」

「よし、無事に登録できたみてえだな。次はこっちの窓口だ」

私の登録を待っていたのかゴージャックが私を隣の依頼窓口に連れて行く。

「とりあえず今日はもう遅いし依頼を探すのは明日にしようかと思っただけど」

「ああ、違うよ、シノ殿が倒したスケイルヴァイパーってのは常時討伐依頼が出ていてな、討伐証明部位を持っていきゃ、その場でギルドポイントと報酬に交換してくれるんだ」

「なんと」

「で、これがシノ殿が倒してくれた分、5つの熱感知宝珠…スケ

イルヴァイパーの討伐証明部位だ。これをカードと一緒に窓口に出してみな」

「わざわざ私の分まで拾ってきてくれたのか」

「まあ、命のお礼としちゃ、安いけどな…こっちは今回はほとんど儲けが出なかったんで勘弁してくれ」

「そんなことはないよ、ありがとう」

体格の割に気の回る男だ。ありがたい。

早速依頼窓口に五つの宝珠を提出する。

「ではこれを頼む」

「はい、熱感知宝珠…スケイルヴァイパーですね？五つも！…少々お待ち下さい」

依頼窓口のお姉さんが奥に引っ込んでなにやらごそごそやってたかと思うと二つの袋を持って戻ってきた。

「こちらの小さな方には金貨2枚、こちらの大きな方には銀貨が50枚入っております。スケイルヴァイパー一体5000グラム、合計25000グラムお受け取り下さい」

「ありがとうございます…ところでこれってこっちの大陸ではどのくらいの価値なの？」

前半は窓口のお姉さんに向けて。後半は横にいたゴージャックへの問いだ。

「そうだな。10グラムもあればそこそこ美味しい食堂で飯が食えるな。1000グラム…銀貨一枚あれば一泊2食付きで中程度の宿に泊まれるぞ」

「…大金だな」

「まあな。でも冒険者は武器や防具、治療費で出て行く金も多いからな…油断しているとすぐ無くなるぜ」

「心しよう」

まあ、しかし、これでとりあえずはネイルと生活していく目処が立ったな。

今日はいろいろなことがあって疲れた（主に精神的に）さっさと宿を取ってネイルを抱き枕にして寝よう…

港町サザンとギルド（後書き）

シノさんが凄い勢いでダメ人間になっていってます（笑）

ネイルとお泊まり（前書き）

前話くらいから意識的に行間を空けるようにしています。読み難いとの声が多数あれば元に戻すかもです。

ネイルとお泊まり

「お待ちください！」

踵きびすを返して帰ろうとした私に受付のお姉さんが声をかける。

「まだギルドカードをお返ししてませんわ」

…すっかり忘れていた。もうネイルとの甘い一夜にしか気が向いてなかった。

「今回のスケイルヴァイパー討伐でポイントが一気にDランクに到達しましたわね。おめでとうございます」

「え？二階級一気に？そんなに一気に上がるもんなの？」

「ええ、本来なら一匹であろうとCランクのパーティ…たとえばそちらのゴージャック様とかのご一行が討伐に向かうべきレベルの魔獣です。それをお一人で、しかも5匹も倒されたとあっては…Fランクに留めておく方が無理ですわ」

「まあ、実際シノ殿がFランクなんて言ったら俺たちの立つ瀬がないし、新人どもの依頼を横取りするようなもんだしな…素直に受けておいたらいいんじゃないか？」

なるほど…そういう理由もあるのか。

「分かりました、ありがたくお受けします」

「受けられる依頼は自分のランク＋1～－2までだぜ。シノ殿のDランクならCからFまでってこった」

「補足説明ありがとうございます」

ゴーバック、説明役を奪われた受付のお姉さんが睨んでるぞ。

「まあ、細々としたことはまた明日依頼を探す時にでも聞くよ…
とりあえずゆっくりお風呂にでもつかって休みたい」

「ん？浴場付きの宿屋か？そりゃあ…ちよっとお高いところしかないぞ。ここら辺なら…」

ギルド直営の宿に泊まるゴーバック一行と別れて、私はゴーバックから紹介されたその、「ちよっとお高い宿」にネイルをつれて向かった。

「浴場が使えないってどういうこと？」

明らかにネイルの方を見て大浴場の使用を渋ってきた従業員に私は詰問した。

「いや、その…奴隷も一緒となると衛生面から嫌がるお客様もいらっしやいます…」

「ほう…私のネイルが汚いとも…？」

「い、いや、その…」

実際、服はともかく清涼丹を飲ませた時点で、病気どころかフケの一片まで綺麗になっているのだが、そこまでは分からないか。

「あ、あの、シノ様、私でしたらお気になさらず…」

「いやよ。私が、この手で！ネイルの爪から毛並みまでぴっぴっかに磨き上げたいの！」

「で、でしたら…その、妥協案というか」

「ん？」

「少しお高いですが、スイートルームであれば…共同浴場ではなく、室内に浴槽がありますので」

誰にも邪魔されず二人っきりのバスタイム。

「仕方ないわね。それで手を打つわ」

即答だった。

「ふんふん♪」

鼻歌を歌いながらネイルの髪にブラシを通す。

「髪も栄養状態が悪かった割に艶々ねえ…ほら出来た。可愛いわよ」

甘いバスタイムも終わり、私は脱衣所に設置された銅鏡の前でネイルの髪をいじっていた。

ちなみにネイルは着やせするタイプでした。背が低めの割にメリハリの効いたボディで…いろいろ暴発しそうになるのを押さえるのにいっぱいでした。

ちなみに一泊500グラム。それだけの元は取りましたよ！

「あ、ありがとうございます。でもっ！シノ様こそお綺麗で…」

「ふふ、ありがとう」

別にネイルの言葉は主人に対するお世辞ではない。

この世界に来て初めて鏡を見て分かったのだが、私の容姿は元の私の面影はあるものの、だいぶ美化されていたのだ。

これもゲームキャラクターである『神楽紫乃』がリアルの私に影響した、ということなのだろう。

「そろそろ、お食事も部屋に用意されている頃だからごはんによっか」

「はい」

この世界に来て初めてのまともな食事である。いやが上にも期待は盛り上がったのだが。

「なによコレ」

確かに値段だけのことはある。食べきれないほどの豪華な食事がテーブルの上に並べられている…私の分だけが。

ネイルの分はというと、テーブルの下にトレイが置かれ、食べかけのパンとスープと焼き魚が置かれている。

明らかに残飯だ。しかもスプーンもフォークもない…手づかみで食べろとでも言うのか。

そしてその前に、ネイルが直接床に座っている。

「すごい、白いパンです…お魚もあるなんて」

しかし、そんな待遇にネイルは心から感激しているように見える。今までどれほど劣悪な環境だったんだ。

「ネイル、そんな冷たい床に座ることはないわ。一緒にテーブルで食べましょう?」

「そ、そんな…奴隷がご主人様と一緒にテーブルでなんて恐れ多いです」

「ふーん、そう…どうしても?」

「は、はい」

「…なら」

所持品欄を展開、『畳』を選択。これはゲーム内で個人の屋敷を持った際に屋敷の内装をカスタマイズするアイテムの一つだ。

「設置場所選択：設置×6：ついでにちゃぶ台：設置×1：座布団も：設置×2、と」

あつという間に冷たい石の床に6畳の簡易和室スペースが出来た。

「え？これは…どこから!？」

「んー、食事の後にね」

さらに所持品欄から食料アイテムを選択。「戦オン」は日本各地の名物が食料アイテムとして登場するので種類がとても豊富だ。

「月見うどん、へぎそば、笹団子、あんころもち、おけさ柿、蛤の酒蒸し、おやき、ほうとう、ちゃんちゃん焼き、南高梅のおにぎり、鶏の水炊き…」

どんどん取り出してちゃぶ台に並べる。

「…見たこともないご馳走です。シノ様のお国の…？」

「そゆこと。さ、一緒にたべよっか」

「え、でっでも」

「私の国では床に敷いた畳の上に直接座って生活するんだよ？もちろん食事もね」

結果…はじめは恐る恐る食べていたネイルも次第にその速度は速

くなっていき：最後は泣きながらかき込んでいました。
大丈夫、ゆっくり食べていいんだよ。

食後1時間ほどして。私はネイルと今後のことについて話し合うことにしました。

「まず当面の目的は：土地を買う事と、ネイルを奴隷の立場から解放する事です」

「し：シノ様っ！わ、私何か粗相しましたでしょうか！？す、捨てないで、ください：」

涙目で見上げないでくださいネイルさん。思わず襲いそうになります。

「馬鹿ね、捨てるわけじゃないの：「私の」ネイルが奴隷なんて呼ばれて蔑まれるのに我慢がならないだけよ。それに：「奴隷でなくなってもシノ様のモノですっ」て熱い告白をくれたのは誰でしたっけ？」

「あ、あう：」

真っ赤になって黙ってしまうネイル。可愛い。

「土地は：ね、家を建てる為。土地さえあれば建物の方は当てがあるからなんとでもなるわ」

当て、というのは戦オン内で持てるマイホーム「屋敷」システムだ。

身分と多額の金銭が必要であるが、もちろんこれを私は所有していた。

後はこれを設置するだけの広くて利便性の高い土地があれば、あ

つという間にマイホームの完成である。

「そうね…貴族の屋敷を建てられる位の土地って…町中だどどの位するのかしら」

「想像もつかないですけど：100000グラムじゃ足りないと思います」

「そう、じゃあ余裕を持って300000グラム…金貨30枚つてところかしらね…目標金額は」

Cランク魔獣で一体銀貨50枚だから、そこまで無理な金額じゃないわね。

「で、問題は奴隷身分からの解放ですが。どうなの？これって主人である私が自由にしたいよって言ったら奴隷じゃなくなるの？」

「公的な身分としての奴隷ならその通りです。昼間にやったみたい
にこの『隷属の首輪』にシノ様が触れながら契約神プロミス様に
解放を約束すれば…」

「ふんふん。こんな感じ？『契約神プロミスに申し上げる。クノイチ、シノ・カグラ所有の奴隷ネイルは主である私の意志により対価無くその身分を解放する』」

おお、ネイルの首輪が光ってるよ。何となくそれっぽい事言っただけなのに成立するんだ…

「はい、これで私の公的な身分は奴隷から平民になりました…ありがとうございます、シノ様…でも…」

「ん？ なあに？」

「奴隷でなくなっても、私、シノ様にお仕えしたいんです。今度
は私の意志で……『奴隷』ではなくて『従者』にしたいだけません
か？」

「そうね、それでネイルがいいのなら…」
「ありがとうございます、シノ様…」

こちらこそ、だよ。

異世界に一人で飛ばされて心細いところに、すぐにこんなに慕ってくれる子が出来るなんて…幸運とっていいよね？

「あ、そういえば…さっきから「公的な身分」としての奴隷って言うてたけど…どういう意味？」

「ええと、私は冒険者ギルドに『クラス雑益奴隷』として登録されていきますので、そちらはそのままなんです」

「え」

「でも、そちらはそんなに不利益がある訳でも…」

「だめっそっちも何とかする！」

「と仰っても…クラスチェンジするにはクラスレベルが15以上必要です」

「クラスチェンジすると…何になれるの？」

「ええと、たしか『メイド』か『従者』…」

「それだ！」

ネコミミメイドさんきたああああ！！

「明日から資金稼ぎを兼ねてネイルの急速レベルアップ作戦…作戦名『パワーレベリング』を発動しますっ！」

「は、はいっ！」

「ついては…参考の為にネイルのステータス見せてもらってもいい？私も見せるから」

「はい、もちろんです！えーと…どうぞ」

ネイルのギルドカードはその体毛と同じ純白だった。そこに表示

された内容は：

氏名ネイル・サヴァン 性別女 年齢14歳

総合レベル1 ギルドランクF
クラスレベル『雑益奴隷』1

ステータス

HP 25

MP 800

STR 14

VIT 15

DEX 12

SPD 15

INT 10

MID 9

称号

マナの申し子

固有スキル

部分獣化

属性補正

闇+10%

光+10%

祝福

神楽紫乃

「へー、すごいじゃない！MP800とか、かなり多いんじゃないの？」

「あ、あれ…いえ、前は10位しか無かったはず…称号マナの申し子？属性も闇+10が増えて…祝福欄にシノ様のお名前が！？」

「あ、あはは…何でだろうねえ…」

あれか…ハグでマナ大量に与えちゃったせいかな。ここまでくると誤魔化すのも無理が…ある程度話さなくちゃかな。

「じゃあ、次は私ね」

すべての情報を開示状態にして、カードをネイルに渡す。

「れ…レベル85…？レベルの限界値って50のはずじゃ…MP測定不能！？それにこのステータス…限界値の18が三つも…ほかも軒並み平均以上で…ぞ、属性補正+50なんて伝説にも無いはずです！！！」

私は、異界からきた事、二つの世界のマナの橋渡しとして存在している事を話さなければならなかった。

たとえばそれが原因でネイルに恐れられ去って行かれる事になったも。

だがすべてを聞き終えたネイルは屈託のない笑顔でこう言った。

「さすが私のご主人様です」

私は思わずネイルをベッドに引き倒して…思う存分ネコミミと尻尾をモフリ倒した…

「あつ、ああっ！シノ様、そこ…敏感なんですう…」

途中からネイルの声がやたら色っぽくなって息も絶え絶えという風だったが、あえて無視した。

ネイルとお泊まり（後書き）

今回はパワーレベリングのお話かな。

ネットゲームなどでレベルの高いプレイヤーが低レベルプレイヤーを連れて強敵の沸く所で一気にレベルアップさせることを言います。たぶん。

ネイル・サヴァン視点（前書き）

すみません、パワーレベリング編の前にこれを入れておかないとどうにも都合が悪かったので、急遽入れました。次こそはパワーレベリング：

ネイル・サヴァン視点

森が燃えていた。

私の故郷、サヴァンの森。

私は森の中に小さな集落を作って住んでいた獣人族の一人、ネイル。サヴァンの森のネイルだからネイル・サヴァンだ。

それがある日、気がつけば村も森も燃えていた。

周りからは仲間達の怒号や悲鳴が聞こえている。

果実の採集から戻ってきた私とその光景に呆然としていると、後ろから下卑た男の声が聞こえた。

「まだ餓鬼だが…まあ、いいか」

途端、私は頭に強い衝撃を感じて、意識を失った。

それが奴隷狩りに来た人間どもの仕業だったと分かったのは、檻に詰められ、馬車で運ばれて行く途中だった。

「獣人の奴隷なんて何に使うんだよ…魔獣との相の子なんぞ誰も抱きたがらねえだろう」

「戦闘奴隷さ。隷属の首輪があれば忠実で屈強な奴隷のいっちょあがりだからな…」

「後は護衛に使ってもいいし、戦の盾として使い捨ててもいい。王都でも需要は多いな」

「ふん…いずれにせよ凶暴な獣人の村一つ皆殺しにしたんだ、報酬は弾んでもらわねえと割に合わんな」

その後もじっと御者席の男達の話に耳を澄ませていると、この奴

隷狩りが人間の世界でも違法な行為であり、奴隷の出所を隠す為、捕らわれた者達以外は皆殺しにされた事が分かった。

その話を聞いて以後、私は何度も脱走しようとしたが「隷属の首輪」のせいだことごとくが失敗に終わった。

「隷属の首輪」は主の一言で強く首を締め付ける魔法と位置探査の魔法が掛かっている。

異様に広いその魔法の効果範囲のせいで一度も成功しなかったのだ。

脱走する度に私の体には鞭の傷が増えていき、食事は家畜の餌に劣るモノになった。3回目からは焼き印を押された。

「淫売奴隷」「豚獣人」「食肉用」その体を千切られるような痛みと、日々衰えていく体力に私は段々と反抗する意識を刈り取られて行き：

最後には主人の足下で残飯を手を使わずに貪る、そんな奴隷の生活を受け入れてしまっていた。

そんなある日、主人の荷馬車の御者をして森を進んでいた私は：一瞬にして右腕を食いちぎられていた。

そこにいるはずのない強力な魔獣「スケイルヴァイパー」の集団にぶち当たったのだ。

「きゃああああああっ！！」

久しく出していなかった痛みによる絶叫が森の中に響いた。そして、そのおかげで私は生涯の真の主人に、出会った。

「冗談…人間が素手でスケイルヴァイパーを切り裂く…？」

私達の一行の危機に駆けつけたその人は、つややかな黒い髪をポニーテールにして、だぶついた黒い上着とズボンという出で立ちの極めて美しい女性だった。

武器の一つも持っておらず、防具らしい防具もない。しかしスケイルヴァイパー相手に見せたその働きはとも人間とは思えなかった。

私はその美しい、まるで舞のような動きに目を奪われていたが、やがて血を流しすぎたのか、意識を失った。

目を覚ました私に待っていたのは怒濤の急展開だった。助けてくれたあの人が私を欲しているという。

私はあの人への報酬として譲渡される事になった。

「よろしい、これで譲渡手続きは完了した。ネイルは煮るなり焼くなり好きにしていいますぞ」

「そんなんしないわよ。愛でるに決まっているじゃない。こんなっ…ふわっふわな尻尾なのよ！？耳なんかもふもふよ！？これを愛でないでどうするの！？」

変わった人だ。

獣人は魔獣との合いの子と呼ばれ、人間からは忌み嫌われていると思っていたが…

その獣人であり…しかも隻腕である私を、この人は愛でるという。獣人の誇りである耳と尻尾を褒められたのは少し嬉しかった。

「神楽紫乃…こちらの読み方だとシノ・カグラかな。『クノイチ』よ。レベルは内緒」

新しい主人はシノ様、というらしい。クノイチというクラスも聞いた事が無いが、あの戦闘の様子からしてかなり高レベルなのだろう。

それに、新しいご主人様は人を驚かせるのが趣味に違いない。部位欠損を再生させるような超高価な魔法薬を奴隷に使わせるなんて！

おかげで私の右腕はあっさり復活した。それどころか焼き印の痕も跡形もない。むしろ以前より調子がよい。

おまけに魔力量がとんでもない事になっている気がする。薬の効果というよりむしろ…ご主人様に抱きしめられた時に感じたあの不思議な多幸感…あれのせいのような。

私はその不思議な多幸感に酔っていたのだろう。でなければこんな恥ずかしい台詞：

「わたし、一生ご主人様に尽くします！たとえ奴隷契約が切れても、生涯この身はご主人様の物です…」

ぎゃー思い出しただけで死ぬるっ！しかもあの時ご主人様の靴にキスなんかしちゃったりして！！

それからの私は、新しい主人の寵を得ようと必死で媚びを売った。もうすでに私は心の奥まで奴隷であったのだろう。絶対的な強者であるご主人様の庇護を失うまいとその様は見苦しいほどだった。

だが、結果からしてそれは余計な心配であったと言える。

ご主人様の非常識さとお人好しぶりはそれほどまでに突き抜けていた。

奴隷を風呂に入れる為500グラムもするスイートルームを取るとか、ましてや一緒に入浴し奴隷の髪を洗うとか…あべこべではないか。

そして：食事の時。

奴隷は床で残飯を食うもの、と、食卓への同席をご遠慮申し上げると、とんでもない事をやりだした。

堅くて四角いマット、足の短いテーブル、クッション、そして見た事もないご馳走の数々。

これらをご主人様：シノ様は『空中から取り出して見せた』のだ！
無から有を作り出すなどいくらシノ様が別の大陸から来たといってもあり得るのか？それはもはや神の領域ではないのか：

しかしそんな疑問も一時の事だった。恐る恐る手をつけたそのご馳走のあまりの美味しさに、気が付けば貪るように食べていた。

食後、少ししてシノ様は私を奴隷の身分から解放すると言い出された。

思わず「私を捨てないでください！」なんて馬鹿な女の台詞を吐いてしまった：

ダメです。もう私はかなりシノ様にやられてしまった様です。

シノ様と離れて自由を得るより、シノ様に飼われる奴隷でいたい、と、そう思うまでに。

結局、シノ様は私の奴隷、という立場が気に入らないだけで、私と離れたい訳ではない事が分かり、奴隷の身分から解放していただいた後、改めて従者として側に置いていただける事になりました。

その後、公的な身分としての奴隷は平民になりましたが、ギルドでのクラスとしては雑益奴隷のままだという事が分かったシノ様は「ならクラスチェンジしてメイドになっちゃえばいいのよね：うふふふふネコミミメイドきたああああ！」と何かよく分からないポイントにツボがあった様で私のレベルアップ計画というものを練っ

ているようです。

シノ様にはいろいろ驚かされっぱなしですが、この日最大の驚きはギルドカードの交換をした時でした。

シノ様にカードを示す為、情報を開示状態にすると、以前と明らかに違っていたのです。

氏名ネイル・サヴァン 性別女 年齢14歳

総合レベル1 ギルドランクF

クラスレベル『雑益奴隷』1

ステータス

HP	25
MP	800
STR	14
VIT	15
DEX	12
SPD	15
INT	10
MID	9

称号

マナの申し子

固有スキル

部分獣化

属性補正

闇＋10%

光＋10%

祝福

神楽紫乃

：MP800って何でしょう。祝福欄にシノ様の名前があるって言う事はその効果なのでしょうか。

そもそもシノ様は『祝福を与える側』の存在という事なのですか！？

「へー、すごいじゃない！MP800とか、かなり多いんじゃないの？」

「あ、あれ…いえ、前は10位しか無かったはず…称号マナの申し子？属性も闇＋10が増えて…祝福欄にシノ様のお名前が！？」

「あ、あはは…何でだろーねえ…」

シノ様はごまかし方はあまりうまくないようです。目が泳いでおられます。

しかし次に他言無用と見せていただいたシノ様のカードの方はもつとんでもなかったのです。

氏名シノ・カグラ 性別女 年齢21歳

総合レベル85 ギルドランクD

クラスレベル『クノイチ』85

ステータス

HP 2500

MP 測定不能

STR 17

VIT 15

DEX 18

SPD 18

INT 13

MID 18

称号

世界の天秤

クノイチマスター

固有スキル

キャラクターチェンジ

マナ解放

マナ譲渡

属性補正

闇+50%

炎+20%

光-10%

祝福

名も無き世界の管理者

「れ：レベル85：？レベルの限界値って50のはずじゃ：MP測定不能！？それにこのステータス：限界値の18が三つも：ほかも軒並み平均以上で：ぞ、属性補正+50なんて伝説にも無いはずです！！」

おまけに固有スキルを三つも持っていて、『世界の天秤』とか、いかにも凄そうな称号があったり。

：本気で精霊か神様の一柱なんじゃないかと思えてきました。そしてシノ様はその私の疑念に気が付いたのか、ご自分の秘密を打ち明けてくださいました。

異世界から世界同士の接触事故で来訪した事。

その際、マナの通り道としてこちらの世界に固定されてしまった事。

自分が好意を持って抱きしめてしまった為に、私に祝福という形で影響が出た事。

正直、一般の人間からこんな事を聞かされれば頭を疑うところですが、シノ様の非常識な能力を知っている私としては、むしろ納得という所です。

ちら、とシノ様の様子を見ると、親に怒られるのを待つ子供みたいな目でこっちを見ってきます。

正直、従者にあるまじき事ですが：可愛い、と思ってしまいました。

この微妙な空気を動かそうとつい、

「さすが私のご主人様です」

と偉そうな口を叩いてしまいました。
ですが、なぜかその私の言葉に感極まったシノ様にベットに押し倒されました。

や、別に嫌ではないんですがっ！一応花も恥じらう乙女としてです
ね、初めての方が女性とか…

「はむっ」

「あうんっ！」

耳？耳ですか？

「さわさわさわ」

「ひうっ」

しっぽも？

「もふもふさわさわ…」

「あっ、ああっ！シノ様、そこ…敏感なんですう…」

同時いいいいー！！

と、いうかですね、肝心の場所はまったく触れてくれないのに、
耳と尻尾だけでもう訳が分からない位乱れてしまいました。

さすが私のご主人様。こっちの方も達人級なのですね…テクニシ
ヤン…

等と思いつつ私の意識は優しい闇に溶けていきました。

パワーレベリング(1) (前書き)

あけましておめでとうございます。今年もよろしく願います。

…ところで、タイトルに偽りアリです。

正確にはパワーレベリングの準備ですね。戦闘までは行きません。

パワーレベリング(1)

翌日、私はネイルを連れてギルドへと赴いた。

ネイルのレベル上げにちょうどいい討伐系の依頼を探すのである。

「あ、シノさん：昨日はありがとうございました」

ギルドに入った私たちに気がついて声をかけてきたのはゴーバツク一行の治療術師、キュアリーだった。

「こんにちは。あなた達も依頼探し？」

「あ、いえ：ゴーバツクさん達はまだ休んでいます：私は：昨日の戦闘で私だけ明らかに実力不足というか：ゴーバツクさん達の力になれなかったというか：それで：」

「レベルアップの為に一人で出来る依頼を探してたのね」

「：はい。あの、シノさん達は？」

「同じく依頼探し。ネイルをレベル15まで上げちゃおうと思つて」

「え？」

「せっかく奴隷から解放したのに、ギルドのクラスではいまだに「奴隷」の名が残ったままだって言うから：だったらクラスチェンジしちゃえって思つて」

「解放？あ、そういえば隷属の首輪が外れてますね：良かったです、ネイルさん」

「どうも」

私の後ろから顔だけ出して答えるネイル。

奴隷時代のトラウマのせいで軽い対人恐怖症の気があるのかも。

「でも…そんなに簡単にレベルって上がるものでは無いですよね」
「まあ…普通ならね」
「…」

なんか急に考え込んだな。キュアリーちゃん。
それはともかく、ちょうどいい依頼があるか掲示板を見てみますか。

「あの。普通じゃない手段がある、のですか？」
「ちよつとスパルタだけだね…あ、これなんかいいかも」

『ランクC 魔獣の素材採集』

最近、西の森に魔獣が増えつつあるのでこの機会に素材を確保しておきたい。

対象 ブレードマンティスの鎌（5組以上）

ホーンドウルフの角（5本以上）

報酬金貨3枚 質、量によって追加報酬あり』

「…ランクCですよ？」

「そうね」

「ネイルちゃんまだFランクのレベル1ですよね」

「そうよ？」

「む、無茶ですよっ！！Cランクって言ったら昨日のスケイルヴアイパーと同レベルですよ！？シノさんは大丈夫でも…」

「問題ありません」

「…て、ネイルちゃんっ！？」

「シノ様が大丈夫と言えば大丈夫なのです…それに…シノ様が私に死ね、と仰るのなら即座に死んで見せましょう」

「…シノさんの奴隷ではなくなっただんですよね？」

「ええ。奴隷契約は解消されました。しかし…」

ぽっと頬を染めるネイル。

「あんなことやこんなことをされては…もはや契約などとは関係なく私の魂は未来永劫シノ様の下僕です」

「なに?! 何されたの!?! 何で頬染めてるのー!?!?」

人聞きの悪い。ちょっとネコミミや尻尾をネイルの意識が飛ぶまで愛でただけだというのに。

「まあ、とにかく。ネイルの安全を確保しつつ経験を積ませる事は可能だということよ。ちょっと準備がいるけどね」

「……………あの」

意を決したようにこちらを見上げるキュアリーちゃん。

「今回の依頼…私もご一緒させてはいただけませんか」

どうしようか。二人同時に守るのは難しいかな…ステータス次第か。

「うーん、ステータス、見せてくれる? 私の方はちょっと理由があってカードを見せられないんだけど」

「はい、かまいません!」

カードを起動し渡してくるキュアリー。カードの色はパステルピンクだ。

氏名 キュアリー・トーレット 性別女 年齢15歳

総合レベル13 ギルドランクD

クラスレベル『治療術師』13

ステータス

HP 255

MP 263

STR 10

VIT 10

DEX 11

SPD 9

INT 15

MID 16

称号

無し

固有スキル

治療効果+5%

属性補正

光+5%

祝福

医療神フェイタス

「ふむ。技能とか魔法とか何持っているの?」

「あ、それはですね、ここをこうして…」

キュアリーちゃんがギルドカードの画面を横にスライドさせると別の画面が出てきた。

…そんな機能もあったんだ。スマートフォンみたい。

スキルスロット 2

セットスキル 【治療術初級】 【治療範囲拡大】

習得技能 治療術初級（キュアライトウーンズ、キュアポイズン）、治療術中級（シールド、レジストスリープ、ライト）、治療範囲拡大

「ネイル、スキルスロットって普通、どのくらい持っているものなの？」

「総合レベルが1の時点で一個、それ以降レベルが10上がるごとに一個ずつ増えていきます。最大で40レベル時の五個ですね。50レベルに達した者達のさらに極一部がスロット六個になると言われていますが…」

…とすると「戦オン」仕様でスロット10個、スロット付きアクセサリー装備でさらに+2個、合計12個のスロットを持つ私はますますチートだな。

もっともこっちのスキルスロットは【治療術初級】（キュアライトウーンズ、キュアポイズン）みたいにいくつかの技能がまとめてセットできる場合があるみたいだから、一概にどちらが優れているとは言えないけども。

「…広域回復が出来るというのは好都合ね、いいわ、一緒に行きましょうか」

「あっ、ありがとうございます!!」

両手を組んできらきらした瞳で私を見上げてくるキュアリー。

ネイルが子猫ならキュアリーは仔犬か…全力でしっぽを振る幻影が見える。

「じゃあ、とりあえず手始めに装備を整えましょうか…近くに製造と販売、両方手掛けている武具屋はある？」

「はい、えーと、ポルテの武具店が一番近いでしょうか」

私は先ほどの依頼を窓口にて受けると、キュアリーの案内でポルテの武具店に向かった。

「いらっしやい、何が必要だ？」

店主のポルテは小柄ながらもがっしりとした壮年の男だった。

「ネイルはどんな系統の装備ができるの？」

「雑役奴隷のクラスは下級職ですので、布製防具と小型武器が精々ですね」

「布製か…あまりいいのは無いね」

「悪いな、どちらかというと金属加工製品が主力なんだな」

店主のポルテがボソツとつぶやく。

「あ、ごめんなさい…そんな意味で言ったのではないのだけど」

しかし実際ここにはネイルが装備出来る防具はあまりいいのはない。

私は『所持品欄』を開いて手持ちの布製防具を探す。

「ん、こんなもんかな…」

店主から見えないよう体の影に隠してそれを取り出す。

『絹の袖無し忍服』

レベル制限無し

防御力35

術防御10

生命力付与120

それを出すところを見たキュアリーが目を白黒させている。

「え、今どこから…」

「店主、試着室みたいなものはある？」

「おう、そっちの突き当たりのドアだ」

「ありがとう、使わせてもらうわ」

私は二人を引っ張って試着室へと入った。

武器を振り回す必要性からか、日本の衣料店みたいな半畳サイズの試着室ではなく、八畳サイズの石畳の部屋だった。

「とりあえずネイル、私のお古で悪いけどこれを着てみて？」

先ほど取り出した絹の袖無し忍服をネイルに渡す。

「…これは…絹ですか！こ、こ、こんな豪華な布地で戦うんですか？」

「お古だって言ったでしょ？気にしないの」

「は、はい…ありがとうございます」

おずおずと着替え出すネイル。ぼろ布の様な服を脱ぐと出てきたのは、一糸まとわぬ玉の様なお肌。

あ、いかん、下着はまだ買ってやってなかった。いや、わざとじゃないですよ？

「ごめんね、下着はまた後で買おうね」

「いえ、そんな…凄いです、この服…肌触りが凄く優しいのに丈夫で動きやすいです」

感激しながら体のあちこちをさわさわとさわって確かめるネイル。

「でしょ？下手な革鎧以上の防御力があるからね…ふっふっふっ、それに、それだけじゃないのだよ。自分のステータス確認してごらん？」

「？はい…！！HPが120も上がってます！」

「うん、生命力付与してあるからね。これでちよつとやそつと攻撃がかすつても大丈夫」

「……………付与武器！？凄い、魔法の防具ですね！」

やたらとテンションが上がるキュアリー

「魔法武具といえば冒険者の憧れ。一つの目標ですよね…いいなあ、ネイルちゃん」

「…パーティ組んでいる間だけで良かったら貸しましょうか？」
「え、私にも貸していただけるんですか！？てゆうかそんなに魔法の武器持ってもらっしゃるんですか…」

期待に瞳を輝かせるキュアリー

「えーと、回復職ならちよいどいいのが確か…」

所持品欄を開いてそれを取り出す。

『年賀の巫女服』

レベル制限 5レベル以上

防御力40

術防御15

詠唱短縮（回復呪文限定）

『戦オン』で正月イベントをクリアした記念に取得できるネタ防具で、忍者だろうが鍛冶屋だろうがこれを着た途端、巫女ルックになってしまうという二次効果がある。

防御力はそれほどでもないこの防具だが、詠唱短縮（回復呪文限定）が有能すぎて、一時期回復技能を使える職がすべて巫女ルックになってしまい非常にややこしかった。

「やつ、やっぱり何にも無いところから道具が…」

「うん、まあ、そーゆーマジックアイテムがあるんだよ。そゆことにしといて…とりあえず、これを着てステータス確認してみて」

「は、はい…」

頭上に？マークを張り付かせながら着替えるキュアリー。

うん、彼女の肌もすべすべしてて眼福ですね。

「朱と白で可愛い服ですね…あ…なにこれ!？」

ギルドカードのステータスを確認したキュアリーが思わず声を上げる。

「こ、固有スキルに 詠唱短縮（回復呪文限定） って付いているんですけど…」

「うん、回復呪文限定で詠唱時間が半分になるね」

「すっ！すごい！凄いですシノさんっ！！そんな効果を持つ魔法武器なんて、少なくとも一般に流通なんかしてませんよ!？」

「うん、だから内緒にしてね。いろいろ面倒な事になるから」

「は、はいっ!」

「じゃあ次は、武器、かな」

着替えを終えた二人を伴ってポルテの所に戻る。

「店主、すまないが次は炉を使わせてくれないか？」

「炉？何するんでえ」

「いや、この子の為に得物を自分で作ってやりたくてね」

「…同業者には見えねえがな」

「まあ、昔の話だけどね…すぐ終わるからこれで頼むよ」

ポルテの手に銀貨を一枚握らせる。

「ふん、一時間だけならな」

「ありがとう、感謝するよ」

にっこり笑いかけてやったらポルテは真っ赤になっていた…以外と純情なのか。

さて、これからの肝は：まだ試してない固有スキル、キャラクターチェンジだ。

私は火事場の炉の前に行くとネイルとキュアリーの二人を下がらせる。

「ちよつとこれから変わった事をするから：危険だといけないので離れていてね」

「はい」

技能画面を開き固有スキル、『キャラクターチェンジ』を実行。
ウィンドウにキャラクター選択画面が現れる。

『鍛冶師LV60』を選択、タッチすると：

私の姿は一瞬でポニーテールからショートカットになり、忍者の格好から前掛けをかけた職人っぽい格好になった。

：うん、どうやら記憶や感情、パーソナリティは各キャラ共通で保存される様だ：良かった。

ステータスを確認すると

氏名シノ・カグラ 性別女 年齢21歳

総合レベル60 ギルドランクD

クラスレベル『鍛冶師』60

ステータス

HP 2180

MP 測定不能

STR 18

VIT 18

D E X	S P D	I N T	M I D
1 8	1 2	1 2	1 3

称号

世界の天秤
天下の名工

固有スキル

キャラクターチェンジ
マナ解放
マナ譲渡

属性補正

炎＋50％
土＋20％
風－10％

祝福

名も無き世界の管理者

うん、こっちも異常なし。これなら良いのを作ってやれるかな。

「し、シノ様…」

ネイルの声が震えている。やっぱり驚いたかな。

「ショートカットも素敵です…」

「つつこみスルー！？気にするところそこ！？」

うん、まあ、代わりに君がつつこんでくれたから良いよ。キューア
リー

「まあ、いろいろ私は特殊でね…服装を変えると鍛冶職も出来るんだ、位に思ってた」

「え、という事は、シノ様が手ずから武器を作られるのですか？」「そゆこと」

不思議そうなネイル。以前見た私のステータスにはサブクラスにも鍛冶師が無かったからね。

…とりあえず技能セットを『生産用』に変えて…と。

【器用度上昇】 【業物確率上昇】 【小型武器作成】 【刀刃武器作成】
【防具作成】 【所持限界重量上昇】 【神通力付与】 【身体能力付与】
【付与率上昇】 【再鍛錬】

ネイルのレベルが1だから、レベル制限で作れる武器は最底辺になっ
てしまう…それを腕で賄おうというのだ。

「素材は…上位素材の『上玉鋼』と『白炭』で…火種を『カグツ
チの神火』を使って、と『小型武器作成』実行と」

素材を所持品欄から取り出しぽいぽいと炉の中にくべる…普通は
こんな下位武器に使う素材ではないんだが、可愛いネイルの為です。
お姉さんは奮発します。

一瞬でとろけて出てきた鋼を『鬼神の鎚』で二、三回叩くと…あ

っという間に刃物の形に。

「よく知らないけど…普通、こんなに簡単に出来る物じゃないよね…刃物って」

「シノ様ですから」

さらに『再鍛錬』で攻撃力を上げて…おお、再鍛錬が3回も出来た…仕上げに付与を。

「ネイルは光属性持ってたよね」

「はい」

「なら光属性の金剛石を使うか」

直径3センチほどの金剛石の原石を握りしめると私の拳は淡い光を放ち始める。

「え、金剛石って金剛石^{ダイヤモンド}!? し、シノ様いくら何でも私にはもつたいたいですっ!」

「はっはっは、もう遅いですよ」

その光を得物に押し当て念じるとすうっ…と光がそのまま染みこんでいく。

「完成っ!」

出来たのは…

「包丁?」

「…包丁ですね」

「はっはっは、ただの包丁ではありません、これこそ…武器にも

使える超出刃包丁『紫乃壺式』です!」

茎^{なかこ}には燦然と輝く『紫乃』の文字。うむ。会心の作です。

これに大量にストックしてある漆塗りの柄を取り付けてネイルに渡す。

『^{やみなぎ}閻魔の包丁・紫乃壺式』

レベル制限 無し

種族制限 獣人のみ

攻撃力65

魔力消費による攻撃力上昇15%

水系魔獣に対する特効1.5倍

技能『光弾』使用可

「あ、あの…この包丁、凄い魔力を感じるんですが…」

「一応、単純なダメージだけでも…そうだね、昨日ゴージャックが使ってた大剣並にはあるし、魔力を込めれば+15%ダメージが底上げされる。あ、あと水系魔獣には特効があるね。ついでに覚えて無くても光弾が打てる」

「……………」

「あ、あれ?物足りなかった?でもレベル1だとこの辺りが限界で…」

「何ですか、そのむちゃくちゃな機能…下手すれば古代宝剣^{アーティファクト}クラスです」

呆然とするキュアリー。

「シノ様、これ…を、私に？」

受け取った包丁を胸に抱いて泣き出しそうな表情をしているネイル。

「うん、まあ…形が包丁ってのがなんだけど…気に入ってくれ
ると嬉しい」

「……」

「ネイル？」

「大事に、します」

「うん」

「大事にします、ありがとうございますシノ様…」

目尻に涙を滲ませたネイルの笑顔に私は思わず抱きしめようとしたのだが…超出刃包丁ごと抱きしめることになってしまうと気付き、かろうじて自重した。

パワーレベリング(1) (後書き)

正月休みの間に書き進めたらいいなあ、と思っています。

パワーレベリング(2) (前書き)

お気に入り37件…ありがとうございます皆様っ！

パワーレベリング（2）

町から西へ1時間ほど行った所にある森、通称「西の森」…そのままね。

私達はその入り口に来ていた。

「ここには昆虫系や獣系の魔獣が多く出るんです。依頼のブレイドマンティスやホーンドウルフは少し奥に入った所で目撃が相次いでますね」

緊張した様子のキュアリーが町で調べた情報を披露する。

「急に生息数が増えた理由は彼らの上位捕食者であった『アラクネ』が半年ほど前Bクラス相当の冒険者のパーティに討伐されたから…というのが有力な説みたいです」

「…なるほどね。で、再び食物連鎖のバランスに戻る前にブレイドマンティスやホーンドウルフの素材を集めておきたい訳か」

「しよくもつれんさ、ですか？」

きよとん、と言葉を繰り返すネイル。

ああ、こっちの世界にはまだそういう概念が無いのか。

「んーと、植物を動物が食べ、その動物をより強い動物が食べ…最後には死んで大地の肥やしになり、再び植物の栄養になって芽吹く…といったサイクルのこと」

「そういう考え方は初めて聞きましたけど…確かに言われてみれば納得ですね」

「ごしゅじ…シノ様は博識なのです。異か…他の大陸を知っていますから」

ネイル：うっかりぼろつと言いきなっただよ。
ここは話題をそらす為にもそろそろ行きますか。

「それじゃ、そろそろ行こうか：二人とも装備は良い？」

「はいっ！」

「大丈夫です、シノ様」

ネイルは『絹の袖無し忍服』に『闇薙の包丁・紫乃壺式』

キュアリーは自前の『シルバーロッド』と私からのレンタル『年賀の巫女服』だ。

ちなみに私はクノイチに再びキャラクターチェンジをし、更に今回はちゃんと装備に身を包んでいる。

『霞の忍者鎧』『玄武の鉢金』『圧縮腰袋』『龍皮の籠手』『風魔の脚絆』『守護の印籠』

武器は『岩切の小太刀』『波切りの小太刀』の二刀流だ。

「スキルのチェックもね：ああ、そういえばネイルはスキル何か持っている？」

「雑益奴隷のレベル1で持っているのは『レジストペイン』だけなので、悩むまでも無いです」

「レジストペイン：痛みに耐える技能？ 防御力が上がるの？」

「いえ、ただ痛みに鈍感になるだけで…」

微妙な：対お仕置きスキルなのか：

「ち、ちなみに他にはどんなスキルを覚えるの？」

「そうですね、『アンチビュート』は鞭の攻撃に対して防御が上

がります。『レジストワード』は相手の悪口雑言に耐えることが出来ます。マスターレベルになると死に至るダメージでも快楽に変える『チェンジペイン』とゆースキルが：

「よし、一刻も早くクラスチェンジしようか」

ふ、不憫すぎる：

「私は治療術初級と治療範囲拡大で良いでしょうか」

私がネイルの不遇すぎるスキルに密かに涙していると、キュアリ―がスキルの確認を求めてきた。

「そうね、それで良いと思うわ：ああ、そうだ、今回は相当の素材を回収するから：二人ともこれを持ってて」

私は二人にスーパ―のレジ袋（小）サイズの綿の袋を渡す。

「これは？」

「シノ様のお腰の袋とお揃いですね」

「そう、これは圧縮ふとん：もとい、『圧縮腰袋』：二人に渡したのは30種類の道具を大きさに関係なくそれぞれ99個まで収納できる魔道具マジックアイテムだよ」

「！それは：世の冒険者が聞いたら目の色を変えて欲しがりますね：もしかして、シノさんが時々空中からアイテムを出していたのも：？」

「そういうこと」

それに加えて『物品転送符』のおかげで、直接4キャラクター共同倉庫から物を出し入れ出来るから、実質ほぼ無限に持てるし重さも感じないけど。

「よし、装着したね」

「「はい」」

「じゃあ、近くに寄って…『隠形』」

隠形は隠れ身と違って完全に姿を隠すものではないが、その代わり術者を含めて6人までに効果が及び、効果時間も長い。いわゆるトヘ〇スだ。

（静かにね…このまま奴らの生息地へ向かうよ）

（はい）

（分かりました）

森の中を獣道をかき分ける様にして進み約2時間。

私は明らかに周りの気配が今までより物騒になって来ているのに気が付いた。

（そろそろみたいね…心の準備は良い？）

（は、はい…）

（大丈夫、です…）

改めて二人に確認すると、やっぱり大分緊張している様だ。

まあ、いくら私が「二人に危ない目には負わせない」と保証してもそれと本能的な恐怖はまた別だろうしね。

（んじゃあ90分一本勝負で…はい、二人ともこれ飲んでね）

私は例によって薬師で作ってストックしてあった丸薬を3種類ずつ二人に渡す。

(90分、ですか?…これは?)

(んくっ…ごくん)

(ネイルちゃん早いよっ)

(大丈夫です、たとえば毒薬だろうと××な薬だろうと…ふ、ふふ)

いや、そんな怪しい薬じゃないから。

(加速丹、金剛丹、抗魔丹…SPD、VIT、MIDを90分間、倍加する薬よ。副作用も無いから、早く飲んで)

(はっ、はい…ごくん)

(飲んだわね?じゃあ、私も技能セットを変更して…と)

フィールド移動セットからパワーレベリング用セットに技能セットを切り変える。

【回避術極意】 【おとり】 【挑発】 【結界全体化】 【影縛り・改】

【命奪斬】

【多重結界】 【迎撃刀術】 【迎撃手裏剣術】 【二刀流】 【斬鉄二連撃】 【三連撃】

技能スロットを2個追加する効果のある『守護の印籠』のおかげで技能は12個セットされている。

「よっし!では、作戦名『パワーレベリング』始めますか!『多重結界』!」

私が大きく声を上げると『隠形』が解除され、同時に『多重結界』が『結界全体化』によってパーティ全員にかかる。

と、途端に周辺から不穏な気配が膨れあがる。

しかし、なかなか姿を現さない。私がレベル高すぎるせいだろうか。

「じゃあ、まあ…引っ張り出しましょうかね」

私は所持品欄を開くと食料アイテムの一番下にある物を取り出した。

これは食料を生産する時に一定確率で出来る失敗品。その名も『魔物の餌』

「ほーれ、寄っといで」

一見ドッグフードにも見えるそれを景気よくばらまくと、途端に

「「「ぐるおあああああああああつ!!」」」

パーティの周りに巨大な一本角を持った狼…十数頭のホーンドウルフが勢いよく飛び出してきた。

「ひいひい!いきなり多すぎませんかあああつ!」?

「大丈夫…よく見て。シノ様の薬のおかげで目で追えない動きじゃない」

意外なことに、パニックに近いキュアリーに比べて、レベル1のネイルの方が落ち着いて周りを見れている。

「そう、加速丹は動きだけじゃなく知覚も鋭敏にしてくれるわ…結果も3回までなら物理攻撃を防いでくれるから、落ち着いて周りをよく見て…よつと『影縛り・改』!」

私は二人に声をかけて落ち着かせながら、飛びかかってきた四頭のホーンドウルフに向かってスキルを発動、棒手裏剣をそれぞれの影に向けて放つ。

「ぎゃうん!？」

見事に四頭は影を射抜かれその動きを止める。

このスキルは昨日ギルドに登録した『影縛り』の上位スキルで、多少MPは使うが複数に向けて使用が可能な上、発動率も高いという：パワーレベリングの為の様なスキルだ。

おまけに今の私はMP無限というチート状態なので、MP消費という唯一の縛りも無いに等しい。

「動きを止めた敵から二人で集中的に攻撃して!」

「はいっ」

「了解です」

今回は二人の為のレベルアップを兼ねているから、私が無双してしまっただけは経験値効率が悪い：らしい。

そもそもこの世界の『レベルアップ』というのは、魔獣や魔人、魔族、その他の人系種族など、魔法や魔力を扱える可能性を持つものを倒した時に、その『魂の力』が倒した者に分け与えられる事によってなされるもの、だそうだ。

今回のこのホーンドウルフのように一見魔法を使っていなくても身体能力の強化に本能的に魔力を使っていて、それが魔獣と動物の違いらしい。

だから精肉作業の課程で牛を殺しても、狩りで普通のイノシシを狩ってもレベルアップはしない。

パーティを組んでいれば直接倒さずとも最低、半分程度は魂の力けいけんち

を得られるとのことだが、それにしてもキュアリーの様な攻撃手段の少ない『治療術師』は同パーティの中でも成長の遅れる傾向にあるという。

昨日の夜ネイルのパワーレベリングを思いたった時に、この世界のレベルアップの仕組みについて詳しく聞き出して立てた作戦だった。

「ぎゃわん!!」

「すごいっ! 『紫乃壺式』: Cランクの魔獣が紙の様に切り裂けます!」

「え、えーと、とどめっ!」

ネイルが魔法の包丁を振るい、キュアリーがシルバーロッドでとどめを刺す。

その間に私は次々と『影縛り・改』で別の敵を麻痺状態にしている。

時折、麻痺効果が切れて動き出す敵もいるが、それはしょうがないので私が切り捨てる。

結果、15分ほどでホーンドウルフの群れは殲滅することが出来た。

内訳はネイルとキュアリーで12匹、私が撃ち洩らしを仕留めて5匹、計17匹の戦果だった。

「結局依頼の3倍以上倒してしまいましたね: シノ様」

「多いに越したことはないさ: さて、素材を回収しようか」

刃物を持っている私とネイルで角を切り離す作業を行い、キュアリーにはその間の見張りを頼む。

「そういえば、二人ともレベルアップしたんじゃないのかな? ど

う？」

「「はい！」」

よくぞ聞いてくれました、とばかりに嬉しげに報告する二人。
キュアリーは2レベル上がってレベル15に。
ネイルは一気にレベル6に上がっていた。

「それはおめでとう。スキルなんかも増えたのならスキル構成今の内に見直す？」

「私は『光撃術初級』（ホーリーライト、光弾）を覚えました。これでやっと攻撃にも貢献出来ます！」

「それはいいね。戦術の幅が広がる…でもここでは回復中心のセツトの方が良いかな」

「そつ…そうです、ね。ええ、もちろんです！」

早速攻撃呪文使ってみたかったんだろうな、キュアリー。

「私は…今回覚えたのは『レジストワード』『レジストスパンキング』の二つで…いいんです。HP増えたし…」

やっぱりそっち系統のスキルなのね…不憫すぎる。

「さて、一通り素材も回収したし、次はブレードマンティスの巣を探そう…か…いや、」

「どうされました？シノ様」

「ん、探すまでも無かったみたい…こちらに来るわね…大量に」

カサツカサカサカサ…

カサガサガサガサガサ…

ガサガサガサガサガサガサガサガサガサガサ！！

不気味な音を響かせつつ森の奥から藪をかき分けて姿を現したのは：巨大な鎌を持つ人間サイズのカマキリ：ブレードマンティスの群れだった。

「ひいひい！グロいっ！グロいですシノさんっ！」

「ギチギチギチ・・・」 「ギチギチギチ」 「ギチギチギチチチチチ！」

「んー、40匹前後かなあ。ちよつと数が多いね：ホーンドウルフの血に惹かれて来たかな」

「ちよつとで、すまない量だと思っうんですがっ！」

「いざというときは私、シノ様の盾に」

「キュアリー、パニくらない。ネイルは馬鹿なこと言わないの『多重結界』」

私はとりあえず多重結界を張り直してネイルに告げた。

「ネイル、あなたの主人がどれほどのものか：よく見ておくと良いわ：ちよつと経験値もつたないけどね」

そして私は群れの中に飛び込んでいった。

「『命奪斬』の代わりに『反撃術極意』をセット：『おとり』『挑発』『迎撃刀術』『迎撃手裏剣術』発動：『影縛り・改』！」

『おとり』と『挑発』によって敵の大半は私に向かって来ているが『影縛り・改』で動けなくなった数匹が壁となって一度にはかかってこられない。

その壁を乗り越えたとしても『迎撃刀術』『迎撃手裏剣術』で攻撃を防がれ『反撃術極意』でカウンターをくらい『斬鉄二連撃』で

四つに切り裂かれる。

結果として、私は一匹たりとも背後の二人の方へは通していない。

「申し訳ありません、シノ様：私はまだ主の実力を見誤っていました…」

「うん、なんてゆーか：言葉がない、ね」

私は黙々とブレードマンティスの屍を作り続ける。

技量はチート仕様だから良いとして、これだけの凄惨な殺戮を続けているというのにまったく動揺や嫌悪といった感情が沸かない。

あるいは私の精神まで『クノイチ・神楽紫乃』として調整を受けているのかもしれない。

結果として。

10分もしない間に40数匹のブレードマンティスはすべて屍となっていた。

その惨状にさすがにキュアリーは青い顔をしていたが、ネイルの肌はむしろ紅潮していた。

「うっ…うぷっ…」

「素敵すぎます…シノ様…」

私はそんな二人の様子を横目で見ながら未だ警戒を解いてはいなかった。

何か…まだ『何かいる』…今までのとは違うヤツが。

「二人とも…まだその場を動かないで…」

そう言いかけた時。私は首筋に強烈な殺気を感じてとっさに後方へ飛んだ。

ーガオンッ！！ー

それと同時に、私の横にあった樹木が幹ごと断たれ、ゆっくりと倒れていった。

直径30センチはありそうな立派な木だったのだが。

「そこか！」

私はその木の断たれ方や気配から、だいたいの方向を割り出して棒手裏剣を打ったが、ガインッ！と生物に当たったとは思えない音を発して手裏剣はそいつの両手に弾かれた。

「そいつ」、は他の個体よりも遙かに大きく…全長5メートルほどの体軀を誇っており、その体表は金属の様な光沢で鉄のくろがね様に光っていた。

「デス・マンティス…」

キュアリーの呆然とした声が聞こえた。

そいつはブレードマンティスの特殊進化個体…限りなくAに近いと言われるBクラス魔獣、デス・マンティスだった。

で、ただいまブレード&デスマンティスの素材部位を回収中という所です。

数が数なので、再び血の臭いに惹かれて魔獣が来ないように結界石を埋めて安全地帯を作り、それから作業をしています。

デス・マンティスですが、ボスの割に『斬鉄二連撃』二回であっさり沈みました。

「…Bクラスよ？普通、王国騎士団が一小隊でかかるレベルの魔獣よ？何でこんなあっさり…」

「いくら強かろうが所詮Bクラス魔獣…レベルにして30あるかないかという所です。シノ様になう道理がありません」

「…シノさんのレベルってそんなに高いの？」

「主に口止めされているので詳しくは申せませんが…そもそも今回の戦いの中でも六個以上のスキルを同時に操っていましたでしょう？」

「…そうだよ！ということは少なくとも50レベル…神話の英雄と同レベルはあるって事！？」

「はいはい、君たち、そろそろ帰らないと日が暮れるまでに森を抜けられないよーさっさと集めてね」

女3人寄れば姦しいとはよく言ったもので。

素材を全部集め終わるにはそれなりの時間がかかったのです。

戦果

ホーンドウルフの角17本

ブレードマンティスの鎌44組

デス・マンティスの鎌1組

デス・マンティスの魔石1個

ちなみに『魔石』とは強力な魔獣の体内に時折精製される物質で、

魔力の圧縮された宝石みたいなもの。

マジックアイテム

魔法具の核として需要があり高く売れるらしい。

また、レベルもそれぞれネイルが目標のレベル15、キュアリーがレベル17に上がっている。

マンティス系は彼女らは手を出さなかったが、数が数だったのと

偶然とはいえBクラス魔獣を倒したせいで十分な魂けいけんちの力となったら
しい：私はもちろんこの程度では経験値の足しにもならなかったが。
新しいスキルはネイルが『ストーンスキン』と『アンチビュート』
を覚えた。

やっと役に立ちそうなスキルを覚えられてネイルが嬉しそうにし
ていたのが印象的だった。

「よし、じゃあ町に帰ろうか：近くに寄って：『隠形』」

私はトヘ〇スをパーティにかけ、一路サザンの町へと帰ることに
した。

町に着いたのは日も落ち、暗くなった頃だったが私達はまっすぐ
ギルドへと向かった。

依頼窓口に依頼文を提出し、依頼を達成したことを告げる。

「え、今日の朝受けられた依頼ですよ？もう達成されたんです
か？」

「ああ、ちょうど対象の集団と連続して遭遇してね：運が良かったよ」

私がギルドの依頼カウンターにサンタクロースの担ぐような袋を
5つも一気に提出したので周りがちよつと騒がしくなった。

本当は所持品欄や『圧縮腰袋』から直接出したかったのだが、あ
まりそれらを詮索されなくなかったのでギルドの近くで麻袋を5つ
買って移し替えてきたのだ。

「しょ、少々お待ちください…」

あまりの量に依頼受け付けのお姉さんの顔が引きつっている。
ごめんね。夜遅くにやっかいな仕事持ってきて…

「食堂の方で待ってますのでごゆっくり」

私はお姉さんに一言告げるとネイルとキュアリーを伴って食堂スペースの方へ赴いた。

「とりあえず打ち上げでもする？アルコールは無しでね」

「そうですね、あの状況から無事戻ってこれて信じられない位ですし…お祝いしましょうか。ネイルちゃんのクラスチェンジ（予定）祝いも兼ねて」

「…ありがとう」

適当に料理と飲み物を注文して乾杯をしようとした時、横合いからだみ声がかかった。

「姉さん達景気良さそうだなあ。あの袋の中身はマンティスとウルフの素材だろ？どうやって手に入れた？」

声のした方を見ると茶髪の戦士が下卑た笑いを浮かべながら立っていた。

「どうって…指定された場所で狩りをして…」

律儀に答えるキュアリー。

「おいおい、冗談言うなよ。Cクラス魔獣をあれだけ一日で倒し

たつて言うのか？ありえねえな…正直に言いなよ…どつかで魔獣の墓場でも見つけたんだろ？独り占めは良くねえな」

勝手に納得して私とキュアリーの肩を抱いてくる戦士^{バカ}。

「一人で勝手な推論に達したあげく妙齡の婦女子の肩をみだりに抱くとは…もののふとも思えん所行。少し外の空気に当たって頭を冷やしたがよろしかろう」

どうも私は怒ると口調が時代劇っぽくなる癖がある…

「て、てめえ…俺を誰だと思ってやがる！Bランクの戦士…」

トン

私は食器ナイフを一本男の影に突き刺した。

「あ、あれ…？動かねえ…おい、何をした…!？」

「ああ、すまん、そのままでは外の空気に触れることも叶わなかったな…失敬」

『影縛り・改』を対象を一人に絞り込んで使うと効果時間が飛躍的に延びる。

とりあえず2時間位そのまま彫像をやってもらおうかなあ。

「シノ・カグラ様、査定が終わりました」

ちょうどその時、ギルドの依頼受付のお姉さんから声がかかった。

「…あの、その方はいかがなされたので？」

「ああ、なんかギックリ腰みたいですよ。無理するから…」

「…そうなんですか、お大事に。では、査定をお伝えします。こちらへ」

「分かりました」

私達は食事をいったん中止してギルドの依頼窓口へと戻った。

「では、今回の依頼の査定についてお知らせいたします…

ホーンドウルフの角17本

ブレードマンティスの鎌44組

依頼内容がホーンドウルフの角5本、ブレードマンティスの鎌5組でしたので追加報酬含めまして金貨17枚となります。

それから、御3人様ともギルドランクのランクアップとなりましたのでギルドカードをお出しく下さい」

私が3人のカードを取りまとめて受付に提出する。

「きききききき金貨17枚ですよ！シノさんっ！」

キュアリーが興奮する気持ちも分かる。

食事などを基準に日本と金銭価値を比べると…だいたい1グラム100円位だ。

金貨は10000グラムだから約100万円、今回の報酬は約1700万円相当ということになる。

「ギルドランクはシノ様とキュアリー様がCへ。ネイル様はDへランクアップです…シノ様、この二日間でCまでになってしまいうなんて…どんな無茶をなさっているんですか。お体には気をつけてくださいね」

「心配してくれてありがとう、気を付けるよ…そういうえば名前を

聞いてなかった。これからお世話になるだろうし、聞いても良い？」

「あ、はい、その…ミシエラ、です…」

心配してくれたことが嬉しかったので笑顔のサービス付きでお礼を言ったら受付のお姉さん…ミシエラさんは真っ赤になってしまった。

「シノ様…シノ様はご自分の笑顔の威力を自覚なさるべきです」

なぜか少しネイルが不機嫌になっていた。

私達は食事の続きをしながら今回の報酬について取り分を話し合っていた。(さっきの男は彫像と化して店の隅で立たされていた)

「本当にこんなにもらって良いんですか？ 実質ほとんどシノさんの力じゃ…」

「そ、そうです、手伝いどころかレベルアップにお力まで貸して頂いたのに」

「だから私はデス・マンティスの素材と魔石も貰うってことで。換金すれば金貨3枚にはなりそうなんですよ？」

結局、ネイルとキュアリーがそれぞれ金貨6枚、私が金貨5枚とデス・マンティスの鎌一組、魔石一個をもらうことで報酬を受け取ることになった。

その後は食堂のご馳走に舌鼓を打ちつつ別れを惜しみ、互いの宿へと戻っていった。

ちなみにネイルが奴隸ではなくなった為、今夜はスイートルームからノーマルな部屋に移っている。

お風呂はネイルと一緒に大浴場と露天風呂を満喫した。

体がまだ暖かいまま、ベットに潜り込み、さて、いよいよ明日はネイルのクラスチェンジかな…等と思いながらネイルを抱き枕に眠りについた。

パワーレベリング(2) (後書き)

戦闘シーンって難しいね。

【設定資料】登場人物など（前書き）

ステータスの効果が分かりにくかったかと思って設定資料を追加。
登場人物紹介も兼ねてます。

【設定資料】登場人物など

登場人物

氏名シノ・カグラ 性別女 年齢21歳

総合レベル85 ギルドランクC（パワーレベリング（2）終了
時点）

クラスレベル『クノイチ』85

（ただし別キャラの鍛冶師、薬師、陰陽師に自由に変換することが出来る）

地球名 神楽紫乃 日本国新潟県上越地方出身の女性。時代劇才
タク。

観光用の忍者村のアクターとして働いていた。

スマートフォンで『戦国の野望オンライン』をプレイしていた所、世界間の衝突事故に巻き込まれ異世界に転移。

そのお詫びとして『世界の管理者』から『戦国の野望オンライン』の自キャラの能力を貰った。

現在は世界間でマナのやりとりをするための安全弁として異世界ファリィアスにおいて生活中。

氏名ネイル・サヴァン 性別女 年齢14歳

総合レベル15 ギルドランクD（パワーレベリング（2）終了時点）

クラスレベル
『雑益奴隸』
15

違法な奴隷狩りにあい、住んでいたサヴァン村は壊滅。本人は雑益奴隷として酷使されていた。

シノにちぎれた右腕を治され引き取られてからは、奴隸身分を解放され従者として行動を共にする事に。

[illegible]

総合レベル17 ギルドランクC（パワーレベリング（2）終了

クラスレベル『治療術師』17

レベルアップのために一時的にシノに同行する。

平民なので『トーレット』はトーレット通りに住んでいるキュアリ、の意。

[illegible]

総合レベル18 ギルドランクC（パワーレベリング（2）終了

クラスレベル『戦士』18

クインとキュアリーの二人とパーティを組んでいる。パーティリーダー。

セコくてコスイ。

ネイルの元主人。

獣人には偏見と差別ありまくりなので、虐待はしても性行為には及ばなかった。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

氏名ミシエラ・ポーター 性別女 年齢19歳

ギルドの受付嬢。金髪碧眼の美人さん。
実はサザンの地方領主のお嬢様。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

氏名ポルテ 性別男 年齢49歳

ポルテの武具店店主。

小柄ながらもがっしりとした体格でドワーフに間違えられるのが
悩ましい。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

ファリーアス世界の管理者

詳細不明。口調からして女性っぽい。
シノにチート能力を与えた方。時折メール機能で連絡をしてくる。

これにクラスによる補正が入ったものが最終的な能力値になります。

— — — — —
— — — — —

マナについて

自然に溢れているのがマナ。

体内に取り込み生物が利用できる状態に整えられた物が魔力。

ネコミミメイドの伝説（前書き）

お気に入り登録が急増して151件……!?!?
な、何があったんでしょうか…

ありがとうございますー

今回は戦闘無しです。ネイルいじりの回です。

ネコミミメイドの伝説

窓から明かりが差し込んで目が覚めた時、まだ私の腕の中でネイルは丸まって眠っていた。

昨日はかなりハードな一日だったから疲れたのだろう。

じっと見ていると、時々ぴくぴくとネコミミが動いたり、尻尾がぱたぱたしたりと非常に可愛らしい。

思わずそつとネコミミの根本をつまむと、中指でこしこしとこすってやった。

「ふや…んう!？」

ネイルの体がぴくんぴくんと揺れる。

「寝ぼすけめ…まだ起きないのか？起きないともっとイタズラしちゃうぞ」

今度は反対側の手でネイルのお尻をそつと伝い、尻尾の根本まで到達する。

そして尻尾の裏側に指を3本当てて毛先方向へとゆっくり愛撫する。

「あううん…ん…」

ネイルの表情を見ると唇をかみしめて我慢しているのが分かる。本当はもうとっくに起きているらしい。

「こいつめ…狸寝入りか。そんな悪い子にはお仕置きかなっ♪」

かみっ

ネイルの耳を軽く噛んでやる。

「ひうううんっ!!」

思わず目を開けるネイル。

「お・は・よ」

「は、はひ…」

「寝たふりなんかしてゝもっとして欲しかった?」

「い、いえっ! 起きる、たっ、タイミングがっ!」

「そう?」

調子に乗って喉を人差し指でそっと撫でてやる。

「は、はふ…ん…う……」

「正直に言わないと…:…こうだっ」

いきなり耳噛みにしっぽ撫ぜの同時攻撃。

「あああああ! だめですうう!!」

うーん、ネイルと同衾するようになってからちよいちよいSっ気が出てしまうなあ。

「すっすみませんっ…しっ…シノ様の指が気持ちよくてっ! 寝た振りしてましたあああああっ!」

「はい、よくできました」

私はぺろっとネイルの唇を舐め上げると、ネイルを腕から解放して身を起こした。

ネイルは息も絶え絶えにぴくんぴくんと体を痙攣させたままだ。

「あ…あ、キス、されちゃったあ…」

「はっはっは、女の子同士だからノーカンだよー」

私はいまだ動けないネイルの夜着を剥ぎ、濡れタオルで汗をぬぐってやると忍服に着替えさせた。

「ううん…これじゃ、またあべこべです…」

「気にしないの…今日はさっさと朝食を食べてクラスチェンジに行くよ」

「は、はい…」

結局、ネイルが立てるようになった頃には宿の朝食は終わっており、外の屋台で串焼きをかじった後、ギルドへ向かったのです。

ということで、ネイルと連れ立ってギルドにやってきました。しかし、この町に来てから毎日ギルドに顔を出しているな…

「こんにちは」

クラスチェンジがどの窓口なのか分からなかったのも、とりあえず昨日お知り合いになった依頼窓口のミシェラさんに声をかける。

「はい、シノさん、こんにちは」

「今日はクラスチェンジをお願いしたいんだけど」

「シノさんが、ですか？」

「いや、こっちの子」

「ああ、ネイルさん…そういうえば昨日、クラスレベル15になったんでしたね…では、そちらの奥のドアから入って、廊下の突き当たりの部屋にお越しください」

「ありがとうございます、行こうか、ネイル」

「はい、シノ様」

廊下の突き当たりのドアを開けると、そこには12畳位の部屋に直径3メートル位の魔法陣が描かれた部屋だった。

ちなみに壁にはびっしりと本棚が並び、本来の壁の地肌はまったく見えない。

「いらっしやい」

部屋の奥にいた灰色のローブに眼鏡をかけた老人が声をかけてきた。

他には誰もいないのでこの老人がクラスチェンジを担当する職員なのだろう。

「おじやまします…クラスチェンジはこちらでよろしいですか？」

「うむ…ここで行っておるよ…だが、いかな」

「は？」

「そなた、なぜかは知らんが魂が複数揺らいで見える…そんな不

安定な状態ではクラスチェンジが成功するかは賭じやの」

ただの職員のじいちゃんかと思ったら意外と実力者らしい。
複数の魂っていうのは私の別キャラの存在が重なって見えている
んだろう。

「ああ、ご心配なく。私は付き添いで…こちらの子のクラスチェンジをお願いしたいんです」

「なんじゃそうじゃったか…そなたのクラスチェンジも試してみ
たかったんじやがの」

「はは、また機会があれば…」

なかなかお茶目なじいちゃんだが、今はつきあっている暇は無い。

「うむ。それではお嬢ちゃん、今のクラスと希望クラスを教えて
くれんかね」

「はい、今のクラスは雑益奴隷、希望クラスはメイドです」

「うん？ 奴隷と？…いや、すまん、あまり小綺麗な姿をしておる
から意表をつかれたわい…での、奴隷となれば主人の許しを得ねば
ならんはずじゃが、その辺は大丈夫かの」

「はい、シノ様…ご主人様に身分を開放して頂きました…今の公
的な身分は平民になっています。それとこの格好はご主人様の御好
意です」

「だってねえ…ネイルみたいな可愛い子が不潔な格好しているの
って世界的な損失よ？ おじいちゃんもそう思わない！？」

「うむ、そこは同感じゃ」

じいちゃん目が高い。信用出来るとみた。

「では、そこの魔法陣の中央にこっちを向いて立ってくれるかの

…」

じいちゃんの言葉にネイルが魔法陣の中央に移動する。

「では、まず事前調査じゃ」

魔法陣の一番外側のリングだけが光を放って上昇していく。

「ふむ、クラスチェンジの条件はクリアしているようじゃの…メイドへの転職も問題なしじゃ」

すうっ…と収まっていく魔法陣の光。

「最後にもう一度確認するぞ？本当にクラスチェンジして良いんじゃない？」

「ええ、お願いします…今よりもっと…シノ様のお役に立ちたいんです」

うう、ネコミミメイド萌々でメイドを進めた身になると罪悪感が…

「うむ、では、いくぞ！」

今度は先ほどとは比べ者にならない位の光芒が魔法陣を満たす。

「！」

「動くな！間違っても魔法陣の外に出てはイカンぞ！」

じいちゃんの鋭い声が飛び、ネイルは魔法陣の中央で直立不動の姿勢で固まった。

「クラス情報：『メイド』を解凍：」

壁の本棚から一冊の本がじいちゃんの手元に飛んでくる。

「うむ…これじゃ…記憶野展開…クラス基本情報転送…技能情報転送…基礎能力の適正化開始…」

「うう…う」

光でよく見えないけどネイルの苦しそうなうめき声が聞こえてくる…軽く転職進めちゃったけど、結構つらいものなのかな…

「よしっ！これで最後じゃ！記録保存！」
セーブ

ひととき魔法陣の光が強くなったかと思うと、すぐに収まって行き…そこには無事なネイルの姿が見えた。

「終わりましたか？」

「うむ、もう魔法陣の外に出ても大丈夫じゃ…む？」

「何か異常が！？」

「いや…たぶん悪いことではない…ギルドカードも書き換わっておるじゃろうて、確認してみると良いじゃろう」

じいちゃんの言葉に疑問を持ちつつも魔法陣の中央でぼーっとしているネイルを迎えに行く。

「大丈夫？ネイル」

「…あ、シノ、さまあ…」

くてっ私の腕の中で頰くずおれるネイル。

「なんか…ぽかぽかしますう…シノ様に…抱かれて眠った時みたい…」

「ちょ…!」

「ほほう、なるほどの…」

にやにやしながら私達を見やるじいちゃん。

「ちがっ! そういうあれでは…」

「うんうん、美しいの。若い頃にはいろいろあるもんじゃ」

「だから…」

「安心せい、誰にも言わんよ…」

だからその生暖かい目をやめいっ!

「まったく…おじいちゃん、ソファに何かある? この子、しばらく足腰立たないみたいなんだけど」

「うむ、隣の部屋に休憩室があるよ。そこのソファに寝かせればよいじゃろ…お茶でも入れてしんぜよう」

じいちゃんの案内で休憩室に移り、ネイルをソファに寝かせる。

「ほれ、東国産のグリーンティじゃ。おまえさんにはこっちのなじみがあるじゃろ?」

え、緑茶? 何で私が緑茶になじみがあるって…

「黒髪に象牙色の肌と言えば東国に多いからの…バター茶とどちらがよいか悩んだんじゃが、当たり前か」

…油断の出来ないじいちゃんだな…私の表情から、緑茶で『当た

り』だと見抜いたのか。

「…シノ、様」

ネイルがソファに身を起こす。

「ネイル、もう、体の調子は良いの？」

「はい、ご心配おかけしました…もう、大丈夫です」

「そう、クラスチェンジ自体は無事に終わったらしいから、カードを確認してみると良いよ」

「はい」

カードを起動するネイル。

と、その表情に疑問が浮かぶ。

「シノ…様」

「ん？」

「クラスが『ルミナスメイド』になっているんですが…」

「はい？」

「ほほう、ルミナスメイドになったかの…これはまた…レア中のレアなクラスじゃの」

ネイルの言葉に目を輝かせるじいちゃん。

「ネイル…カード、見せてもらって良い？」

「はい、シノ様…どうぞ」

私は起動状態でカードを渡してもらって中を確認した。

氏名ネイル・サヴァン 性別女 年齢14歳

総合レベル15 ギルドランクD

クラス メイン『ルミナスメイド』LV1

サブ『雑益奴隷』LV15

ステータス

HP 375+120

MP 1030

STR 15

VIT 14

DEX 13

SPD 15

INT 13

MID 12

称号

マナの申し子

固有スキル

部分獣化

家事道具習熟

属性補正

闇+10%

光+20%

祝福

神楽紫乃

「うん：ステータスは全体に底上げされているね。属性も光が20%になってる：固有スキルに『家事道具習熟』って付いてるからメイドはメイドなんだろうけど：確かにクラスの名前は『ルミナスメイド』になっているね」

私はじいちゃんの方を見て説明を促す。

「うむ、説明しよう：ルミナスメイドとは光の属性に特化したメイドじゃ。クラスチェンジ時に魔力の総量が飛び抜けて大きかったり、光の属性を持っていたりすると：極希ごくまれにメイドから派生するところがあるの」

「普通のメイドに比べてデメリットは無いのね？」

「うむ、実質メイドの上位互換職といってもいいだろう：光属性の技能が充実しておるはずじゃ：いやはやまったく珍しいものを見せてもらうたわい」

「：そんなに『ルミナスメイド』って珍しいの？」

「：まあ、そもそも：クラスチェンジしてまでメイドになりたいって者が少ないからの：単にメイドになるなら平民がギルド登録時のクラス選択で選ぶ：というパターンの方が圧倒的に多いしの」

「：なるほど、クラスチェンジの機会がなければお目にかかれな
い職なのね」

：とりあえず悪いことではないみたい：ほっとした。

私はネイルの隣に座り頭を撫でてあげた。

「ご苦労様、良くやったね？レア中のレアクラスらしいよ『ルミナスメイド』」

「シノ様の、おかげです…シノ様の『加護』で魔力が底上げされていなかったら…」

「そんなこと無いよ、ネイルの光属性と相性が良かったんだよ」

ついでに耳も撫で撫でしてあげる。

「そんなこと…んっ…」

「どうしたの？」

「だめですっすみみい…ちから、ぬけま…す…」

ありゃ、やりすぎたか…てゆうか、ネイルの耳がどんどん敏感になっ…て…っている気がする。

私は悪くないです。たぶん。

「ほっほっ…眼福眼福」

あ、じいちゃんの存在忘れていた。

「すっ、すみません、失礼しました…手数料は銀貨一枚でしたね」

「うむ、確かに受け取った。二人とも壮健での…また会えるのを楽しみにしておるよ」

私はネイルを伴ってそそくさとギルドを後にした。

「さて、次は…被服店かな…近くに領主と取引しているようなお店ってあるかな？」

「それでしたら、この通りを右折した先の…ミンスター衣料店が、

たしか」

「領主と取引が？」

「はい」

「よし、行ってみようか」

「おじゃまします」

店内は魔法の明かりなのか明るく照らされており、一目で高級品と分かるドレスから作業服までそれぞれ質の良い物が並べられていた。

「いらっしやいませ」

栗色の髪の30代前半に見える女性が店の奥から出てきた。

「ミンスター衣料店にようこそ。本日はご購入ですか？それとも仕立て？」

「あ、いや…その、ここってメイド服も取り扱ってます？」

「ええ！御領主様邸のメイド達の服はすべて当店が納めさせて頂いてますよ」

良かった、当たりか。

「実はこの子…ギルドのメイド職なんですが、どうせなら良い物を、と思ひまして」

「まあ、お目が高い！ただ、御領主様のお屋敷のメイド服とまっ

たく同じという訳にはいきませんが…」

「ああ、一般販売されているので良いので、一番質の良い物をお願いします」

「承りました。それではこれなど…」

と、示されたのは、紺色のロングスカートのクラシックタイプメイド服。

前掛け部分のフリルもうるさくない程度になっていて、上品かつ、実用的な作りだ。

それに加えセットでヘッドドレスと靴も進められる。

「いいですね、これのセットを着替えを含めて2着と…後は下着のセットを私と彼女の分をそれぞれ5組ずつお願いします」

「はい、ありがとうございます…では、お二人のサイズは…はい、少々お待ちくださいませ」

私とネイルがそれぞれサイズを伝えたと女性は店の奥に品物を取りに戻っていった。

さすがに女性用下着まで『戦オン』のアイテムには無かったからなあ…あっても「腰巻き」とかだろうし、それはさすがに現代人女性として勘弁して欲しい。

「お待たせしました、こちらになります」

おや、メイド服はともかく…下着類も以外といい。絹に近い手触りの柔らかい物だ。

「ありがとうございます、全部でいくらでしょう」

「はい、締めて…銀貨20枚…2000グラムになります」

う、どこの世界でも女性の衣類にはお金がかかるのね…今は懷が暖かいから良いけど。

「では、これで支払いを」

「あの、シノ様、私の分は自分で支払いを…」

「いいの、半分私の趣味で着て貰うんだから」

と、私はさっさと自分の財布代わりの小袋から銀貨を20枚出して支払った。

「ありがとうございます、またのお越しをお待ちしています」

ミンスター衣料店を後にした私達は、他にも細々とした生活用品を店を回ってそろえる等していたが、気が付くとすでにお昼の時間になっていた。

「よし、それじゃあ宿に戻って食事に行こうか」

幸い、ここも元の世界と同じように一日3食の習慣なので、事前に頼んでおけば宿の一階でお昼を取ることが出来る。

「はい、シノ様」

ネイルはフリルの付いた可愛い服が嬉しいのかミンスター衣料店を出てからずっとメイド服を胸に抱えて歩いている。

その彼女を促して、私は定宿している宿へと向かった。

「ん、今日も美味しかった…港町のせいかお刺身まで出ると思

わなかったけど…」

さすがに醤油まではなかったが、ゆず胡椒に似た調味料で食べるお刺身もなかなか美味しかった。

スイートルームの時ほどではないけど、量も十分だし、何よりちゃんとネイルと二人分が出されるようになったしね。

「はい…おさかな…美味しかったです…」

ネイルはちよっとトリップしたみたいになってる。どうも食糧事情の劣悪な奴隷時代の反動で、美味しい食事を取るとこんななるらしい。可愛いから良いけど。

「ネイル、大丈夫？休憩するならお部屋行きましょう。私もちょっと…やる事あるしね」

ふらふらするネイルの背中を支えて2階の部屋へ戻る。

部屋に入るとネイルをベットに座らせ、私は今日買ってきた荷をほどいていく。

その中から2着のメイド服の内1着を取り出しハサミを当てる…

「あ、あの…シノ様？何をなさるんです？」

「ん、1着バラそうと思って」

「な、なぜ？せっかく買ってきたのを」

「うん、型紙代わりにね…しようと思って」

「?????」

ふっふっふっ、混乱しているネイルも非常に可愛くてよろしい。

「猫耳使用人計画最終段階は！戦闘用メイド服の作成です！」

ネコミミメイドプロジェクト

「…もしかして服も…作れるんですか」
「まかせて」

『戦オン』には生産だけの職、戦闘だけの職、というものは無い。どの職も戦闘職としての側面と生産職としての側面を持っている。ちなみに私が所有している4職のキャラは

忍者……布系装備及び忍者道具の制作

陰陽師…魔道具及び召還符の制作

鍛冶師…金属系武器防具の制作

薬師……各種の薬及び印籠の制作

と、各種得意な生産品がある。

本来ゲーム中では布系装備を作るには『型紙』アイテムが必要なのだが、その代わりに1着本物の服をバラして使おうという訳だ。

「ああ、バラす前に技能変えておいた方がいいな…技能セット『生産用』と」

【器用度上昇】 【業物確率上昇】 【裁縫・上級】 【布防具作成】

【所持限界重量上昇】

【神通力付与】 【身体能力付与】 【付与率上昇】 【美的感覚・上

級】 【休息】

技能を変更して作業を再開する。

おお、さすが『裁縫・上級』と『器用度上昇』あつという間にはばらすことが出来た。

続いてそれを順番通りに床に並べ…所持品欄から素材を取り出す。

出来上がりをイメージして『布防具作成』を実行。
すると、私の手が勝手に超スピードで動いて素材を縫い合わせていく。

上木綿、練絹^{ねりぎぬ}、綸子^{りんす}をベースに王虎の毛皮と神龍の鱗で要所を補強していく。

本来なら『メイド』は多少の革鎧系も装備出来るという事なのだが…そこをあえてメイド服で通す為に素材は惜しまない！

また、戦闘用の為スカート丈は少し短くして膝下にしてみた。

「ん、これも使えるかな…」

本来なら宝石や『付与玉』と呼ばれる魔力の固まりの宝玉を付与作業に使う所を、同じ魔力の固まりであるという『デス・マンティス』の魔石で代用してみる。

「おお、うまくいきそう…」

手に持った魔石が砕けると同時に、その魔力は光を発して服に吸い込まれていった。

次に、薬師で作った魔法の染料で、一気にメイド服のデフォルト色に染め上げる。

仕上げは胸元に大粒の宝石を飾りたいが…

「うーん、金剛石だちょっとうるさいかしらね」

ここは同じ光属性の蒼月光石^{ブルームーンストーン}を飾る事にする。

「よし！服は完成！次はヘッドドレスかな」

こちらは小さい分手の入れる余地が少ないが：

「とりあえず基礎部分を玄武のベッコウにして：布部分は上木綿：縁取りを夜叉蜘蛛の糸にして強度を確保：耐魔性能を付加させた：いから黒曜石をつぶして：」

ヘッドドレスには黒曜石の純粋な黒が光となって注がれていく。

「ん、とりあえず完成、かな？いい仕事したあゝ」

と、額の汗をぬぐっているとネイルがやけに静かなことに気が付いた。

「どうしたのネイル、大丈夫？」

「し、し、し、シ、ノ様：」

「ん？」

「一体いくらするんですかー！ーっ！この服っ！！」

「いくらって：：そうね」

『戦オン』の貨幣基準と単純に比較出来ないし：ああ、屋敷システムの一番小さいのの代金と同じ位かな。

「小さな家が一軒買える位？」

「：：：：：ひっ！」

：ネイルは気を失ってしまいました。

1時間後。ようやく目を覚ましたネイルが固辞するのを、今後の

戦闘に必要で、ひいては私の為にもなると言い聞かせて…やつの事で着用を納得して貰いました。

『月光のメイド服』

メーカー…SINO

レベル制限 レベル15以上

種族制限 猫系獣人のみ

クラス制限 メイド系のみ

防御力 75

術防御 60

身体付与 STR+1 SPD+1

技能『重層結界』使用可

『ホワイトブリム・ノワール』

メーカー…SINO

レベル制限 レベル15以上

種族制限 猫系獣人のみ

クラス制限 メイド系のみ

防御力 30

術防御 55

身体付与 MID+1

技能『耐魔結界』使用可

ちなみに着用制限を厳しくしたのは、その分性能を上げる為です
が…おかげで実質ネイル専用となってしまうました…獣人のメイド
なんて聞いたこともないそうです。

まあ、とにかく。

野望の一角、猫耳メイドプロジェクト、達成です！わーぱちぱちぱち。

「うんうん、可愛いわよネイル！」

「あ、ありがとうございますシノ様……」

約1名青い顔をして表情が引きつっています……慣れてください。
私のメイドさんになったのが運の尽きだったのです。

商會を立ち上げました。(前書き)

お気に入り442件：なんかここ1～2日に何かあったのでしょうか！？

あまりに急激な増加に嬉しい悲鳴が。

今回はちょっと短めです。

商會を立ち上げました。

さて、ネイルを名実ともにメイドにして数日。

このままでも一年近くはこの宿で遊び暮らすことが出来る位の所持金がありますが：

堅実な日本人としては生涯宿屋暮らしというのは精神的に良くありません。

ということで初心に返って土地を買う為にお金儲けの策を練ろうと思います。

「ネイル」

「はい、何でしょうシノ様」

私はただいま大浴場備え付けのサウナで俯せになっております。そんでもってバスタオル一枚のネイルからマッサージして貰っています。

はあ…極楽。

後でネイルにもしてあげるねって言ったたら、「とんでもありません！」と拒否されました。残念。

「う、そこ…あのね、ここ数日休養…してたけど」

「はい」

「当初の目的…土地を買う為にそろそろ準備しようと思うの」

「ということは…？」

「うん、ギルドの仕事を再開するのと同時に…商売でもやってみようと思って」

「それは良いですね…で、何のお仕事を？」

「…ん、あ、いい…とりあえずは行商かな…行商って始めるのどこかに許可がいるの？」

「いえ、身分証明：ギルドカードで結構ですが、持っていれば問題ありません。街の中に店舗を開くとなると商工ギルドの加入が義務づけられますが」

「ふむ、なら問題ないかな：じゃあ、お風呂上がったらポルテさんの所へ行こうか」

「：？：：また何か作るの？」

「うん、ネイルの「それ」、ほど凝ったのじゃないけどね」

「：私はシノ様のメイド兼、従者兼、護衛ですから、どんな時であらうと武器を離す訳には参りません」

ネイルの首からは鞘に入った「それ」が銀のチェーンに吊られて揺れていた。

私がネイルの集中レベルアップの為に作った『闇薙の包丁・紫乃壺式』である。

：どうもこれがネイルの新しい固有スキル『家事道具習熟』と相性が良く、従来比15%アップ位の性能向上を見せている。

それに加えて「主から送られた主の手作り^{わたし}」、ということで、ベツトからお風呂まで持ち込もうとする執着ぶりである。

素材採集依頼の時に手に入れた報酬で銀のチェーンを買ってきて、鞘に取り付け、まるでペンダントのように首から包丁を提げて持ち歩いているのだ。

：さすがにお風呂に常時持ち込むと痛むので、鞘に『状態保護』の符を貼り付けてあげる事になった。

：えーと、なんだ：なんかこういうのって：そう、クリスマスプレゼントを貰った翌日の小学生みたい。

「ありがとう、ネイル、もういいわ：気持ちよかった：」

「いえ、いつでもご用命ください」

「うん、またお願いするね：ネイル」

「はい」

「ん…ちゅ」

私の呼びかけに振り向いたネイルの頬を押さえて、唇のそばにうちづける。

「…ししし、シノ様っ!!」

「あはは、ご褒美ということでっ」

私は真っ赤になっているネイルをサウナに置いて、浴室から上がった。

さて、着替えたらポルテの所へ行こうか。

「という訳で、砂鉄か鉄鉱石を都合して欲しいの。後はコークスか炭も」

「…いきなりなんでえ」

朝風呂の後ポルテの武具店にネイルと押しかけた私はいきなり商談を切り出した。

「ちよつとね、仕事先で包丁の行商でもやろうかと思って」

「ふん…まあ、いいか、武器じゃなく包丁だってんなら競合しねえ…だが、原価じゃ俺の儲けがねえぞ」

「とりあえず金貨一枚分売ってくれる？仕入れ値の1.1倍で買うわ」

「おい、いいのか？あんたがギルドに加入して直接仕入れればすむんだぜ？」

「ちよつとね、商売になるか試してみたい事があるの。そのため

のテストケースだから、わざわざ商工ギルドに入るのもね」

「まあ、いいがな。炉も使うんだろ？ サービスだ、追加料金無しで半日貸してやる」

「ありがと♪助かるわ」

商談が成立するとポルテは助手も使って倉庫から金貨0・9枚相当の炭と鉄のブロックを炉の近くに積み上げてくれた。

「まあ、どんな商売するのか知らねえが、がんばんな。俺たちは半日、店頭にいるからよ：終わったら声をかけてくんな」

そういうとポルテ達はさっさと行ってしまった。仕入れの助言をしてくれるあたり、顔に似合わず人が良いらしい。

「さて、半日でこれだけの量：スキルで作るとはいえ：間に合うかな」

私は炉の火を確かめると、所持品欄から半透明な砂を大量に取り出した。

これらは『採掘』スキルで街の近くの河砂から採取した物だ。

珪砂：いわゆる石英とか水晶と呼ばれる鉱物の砂状の物である。

で、いくらただ同然で砂状の物であっても、基本的には水晶と同質の物である。そして『戦オン』では水晶は宝石扱いされている。

つまり、効果は微量であろうとも魔力を付加する触媒たり得るということで：

「超廉価版魔法武器の製造、いってみようか」

チープエディションマジックウエポン

『鬼神の鎚』を握りしめて、私は自分に気合いを入れた：

「んっぷあ！できたあ」

「お疲れ様でした、シノ様」

私はネイルの差し出してくれた竹筒を受け取り、水で喉を潤した。

「うん、素材の割になかなかのが出来たんじゃないかな」

私は目の前に積まれた包丁の山を見つめる。

ライトニングナイフ

『雷鳴の包丁・紫乃番外』

レベル制限 無し

種族、クラス制限 無し

攻撃力 20

水系魔獣に対する特効 1. 2倍

雷撃系追加ダメージ（極小）あり

「何というか…さすがはシノ様、というか…」

「うん？」

「普通、マジックウェポン制作者は何日もかけて寝食を削り武器に魔力を付与すると聞きます…それを小型武器とはいえ50本を半

日で付与なさるとは…」

若干あきれたニュアンスのネイル。

「あはは、でも、ほら、『闇薙の包丁』に比べたら一体成形で手抜きもいいところだし、素の攻撃力だって20前後…ショートソードレベルだし、雷撃追加ダメージは圧電体が珪砂のせいで極小だし」「そもそも、包丁の素の攻撃力がショートソードレベルあるのも十分異常です」

「そうかー、じゃあ売れるかな」

「値段と売り方によっては間違いない」

「そっかーじゃあ、大きな街に行って行商してこようか…近くにここ以上に大きな街ってある？」

「そうですね、北に徒歩で3日ほど行くと王都アイリーザがありますね」

「ふむ、じゃあ明日にでも王都行きの護衛依頼とか無いか探してみようか…」

等とつらつら考えながら包丁を所持品欄にしまっていく。
ちようにど良い依頼があればいいな。

※??? SIDE

なんなんだあれは。
それを見た時、一瞬意味が分からなかった。

俺は冒険者ギルドに所属しているDクラスの戦士だ。

今回の仕事は王都へ行く荷馬車隊の護衛で：滅多に魔物なんかでない街道だから楽勝だと思っただ。

キャラバンの規模が大きいから同じく護衛に雇われた者達も10数人いたしな。

まあ、その中になぜか「メイドの服装をした獣人の小娘」や、「全身黒ずくめのべっぴんさん」がいたのは不安だったが：

異常は2日目の夕方に起こった。

キャンプ地を決めて陣を敷こうとしたその時ー

Cクラス魔獣の『ジュエルリザード』が街道近くの森からいきなり飛び出してきやがったんだ。

それも3匹：

俺は正直、「ああ、これで死ぬのかな」と思ったさ。

奴らはクラスこそCだが、その額の宝石で体に耐物理結界を張り巡らせているせいで、魔法か魔法の武器じゃないとろくにダメージも与えられねえ。

おまけに牙には毒がある。

魔法使いのいないこのキャラバンじゃ逃げるしかねえ。

で、その時間を稼ぐのが護衛の役目だからな：

俺たちは覚悟を決めて『ジュエルリザード』に攻撃を開始した。

少しでも奴らの注意を引かなければ：

だが予想通りこっちの武器はほとんど効きやしねえ。

なのにこっちの傷は少しずつ増えていく：ジリ貧だった。そんな時だ。

彼女らが飛び出してきたんだ。

護衛隊にいた黒ずくめの美女と獣人のメイド少女。

その二人は雷光輝く魔法の武器を持ってあっという間に『ジュエルリザード』を切り裂いていった。
まるで紙を裂くようだったよ。

俺たちは目を疑ったもんさ。

その二人の技量に。

その二人の美貌に。

そしてー

その魔法の武器が包丁^{キッチンナイフ}だった事にー

※??? SIDE END

「大丈夫でしたか？」

私は先頭で剣を振るっていた男性に笑顔で声をかけた。

彼らが時間を稼いでくれたおかげで最後尾の私達が間に合ったのだ。

おまけにこれ以上無いシチュエーション。

普通の武器が効きにくい敵、包丁の雷光が目立つ夕方…
商品のプレゼンには絶好だった。

笑顔くらいサービスしますよ。

「あ、ああ…助かったよ」

「いえいえ、同じパーティーじゃないですか…結構、傷、あります

ね…ネイル！」

「はい、シノ様」

「こちらのおじさまの傷、直してあげて」

「はい」

「すまんね…そっちの子は治療術師なのかい？先ほどは見事な剣捌きを見せてくれたが」

「いえ、わたしは『ルミナスメイド』です…『治療』」

淡い光が男性の全身を包み傷を癒していく。

ネイルが『ルミナスメイド』となって習得したスキル『治療』は、傷薬を消費して回復魔法を発動する特殊なスキルだ。

その回復量は傷薬の約3倍…単体対象ながらもその回復量は『キユアライトウーンズ』を上回る。

「しかし、その…」

なにやら男性が聞きたい事があるようなそぶりをしている。何が聞きたいのか何となく想像がつくが。

「その、包丁？もしかして…」

「ああ、これですか？これは我が「神楽商会」の新製品…『雷鳴
ライトニングナイフ
の包丁』です！」

「…やっぱり包丁なのか」

「ただの包丁ではありません。当社独自の技術によりマジック・ウェポンでありながら驚きの低価格を実現！しかもーネイル！」

私は合図とともにネイルに向かって足下の小石を放る。

「はっ！」

気合い一閃！

小石はネイルが持つ包丁によって、なめらかな断面を見せて4つに断たれて落ちた。

「このように基本能力も手を抜いておりません。しかも常に雷撃をまとっている為、『水系魔獣に対する特効 1. 2倍』が付加されております」

「「「「おおおおおおおおお！！」「」「」」

他の護衛や商人達も興味をそそられたのか人垣が出来ている。

「小型武器だからこそサブウェポンとして持ち歩くのに邪魔にならず、普段は普通の包丁としてもお使いになれば、まさに一石二鳥。不意のアンデットや魔法生物にも十分対応出来ます！」

「「「「うゝおおおおおおおおおおおおおおん！！」「」「」」

もう、その熱狂度はジャパ○ットタ○タレベル。

「でも、そんなに高性能だとお高いんでしょう？」

ネイルの絶妙の合いの手。

「それが、今回は…開業記念特別価格…銀貨50枚の所を銀貨10枚で販売いたします！ただし先着50名様に限らせて頂きます…わうっ！？」

お約束の台詞は最後まで言えなかった。

冒険者達だけではなく護衛対象の商人まで一斉に「売ってくれ」と殺到してきたからだ。

結局王都で売るはずの『雷鳴の包丁』ライトニングナイフ50本は護衛2日目で完売した。

後で相場をよく調査した所、銀貨10枚というのは相場の10分の1以下だったらしい。

それでも金貨にして5枚の売り上げで、材料費除いても金貨4枚…40000クラムのぼろ儲けになった。

ジャパ○ットすげえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7892z/>

偽クノイチ異界譚

2012年1月4日03時52分発行